煙霞小景

卷四

特別
イ4
3152
45

14
3152
45

95-64

煙霞小景

卷四

海府浦

（馬下近傍）

烟霞小景序

昔者李白酒を飲むこと一斗乃ち頹然として醉ひ自ら
称して酒中の仙と謂ふ桃青又武の材を以て深く韜晦て
天然の樂み一笠一杖采雲に伴ひて山水の奇傑を探る
李白の酒に隱れ桃青の世外に超脫する其原や均く
あ[illegible]ふ浮世を厭ひしに因ると雖も然も宇宙
造化の妙様に愛する色の切なるものに代

景樹田文庫

以てあり宇宙の美造化の妙やて至微まて至大高爽
にして精緻天に在て燦こる星辰と地にあるて
蒼々たる青山碧水と成る呼吸ある乾坤
人の此世にあるや家を成し社会を成し國を成す是
於て忠孝の道起る忠孝の道を聖人の教へあるに
萬民の須臾も離るべからざるの上下千歳
世界の成立する間人類の生存する限り照らして
日月と共に輝はざるべからざるもの此道

や人に對する此道のみ宇宙に對するの道は微乎として
此外に存在若しまた吾人また忠孝の道に偏倚
し而し宇宙の美妙に對して更に顧みるあるんで
何ぞ以て乎造化の威意に答ふる成得んや天の人を
生む豈偶然ならんや彼の草の花や桃李や即ち
間雲野霧を倍として物外に超然多くは或は世道
に背くあるとなすに宇宙造化の神靈に對しては
慎かに敬虔あるべきと謂はざる能はざらん

吾友久保青琴は當代青年詩人の逸才なり深く
六朝の華麗と唐宋の典雅とを喜び孜々精研其
造詣未だ測り知るべからざるものあり青琴為人豪放
磊落なれども拙を甘んじて宏闊酒脾にして詩を賦す
所謂青琴一生詩百篇なるもの即ち優々李杜の道
緒を言ふるに似たり年嵐花冠を戴き跡巨海
内を遍歩し北は北海道に南は九州に至る迄全国
の名邑勝區其歴訪を尋ぬるもの甚稀なり

或は高山峻嶽に攀ぢ或は長江大澤に横ぎり或は
奇景絶勝に探り或は名刹大社に訪ひ或は古戦
場を吊ひ或は廢墟を尋ね弥千山を過ぎ萬水に
渉り至る所諷詠吟誦以て其詩藻に試む即ち
知る又一個李白桃菁の亜流たるを彼の煙霞に傲嘯
し晴夜に枕吟して宋宙の美妙を探究するもの
吾青琴に於て之を見る今や其記行凡そ十余篇
を輯録して一冊子となし題して烟霞小景といふ

天下の高山大河奇景勝地概ね其中に網羅し運
筆縱横讀むものをして身其境に在る思あらしむ
真に一部の佳地誌なり惟ふに書琴造化の精妙に
悟入するに於ては李白桃蕾と相伍して或は遜色なき
に在らざるべきも然れども一面高く忠孝の道を標置して
富貴家國の事忘るべからず身を俗界に投して清
風明月の福音伝傳へんと勉むるの所更に李白桃
蕾に比して一頭地抜出するものあらざるべからず是也予が

此冊子を讀むで寂かに青琴の胸臆を忖度し深く
其高風と繡腸とを慕ふ所以なり頃者稿成り来
て予に序を徵す予不似と雖も平素相来往して
親交を厚くするの宜不文の故を以て之を辞せ
ず忍びんや即ち思ふ所を録して其責を塞ぐと
云爾

明治丙申歳晩春北越米南陳人謹識

煙霞小景　第四卷

第十三、北征日乘

晃山　清水嶺　信濃川の舟

長岡附近の石油坑　新潟　越北

海府、浦　温海　羽前三山

鳥海の麓　鳥海山　象潟の跡

太平山　雄鹿半島　大間越

巖木山　函館　野邊地

恐山

第十四 若松紀行 （ひろい書）

材木巖　檜原嶺　柳津虚空藏

若松　猪苗代湖　安達が原

第十五 漚夢録 （五城雷夢作）

北征日乗

去歳北征之途上より一旬にして蹶轅を回して西向し此時さび居しと復た伸びず千秋の遺恨消遣するに出たり一西游三百里山陽流豊の間に行吟し僅に鉛槧を得たりと雖ども人情に於て忍ぶ能はざる所あり而して期日来り偶ま家事の為に旬余を費し七月十日遂に漸く程を取り最初は南行長山に入り越後に出でんとせしに遇ま志す所は陸羽の辺境にして路を誤て此信乗を草し読者怪む勿れ此時を千に先立て俳友方寸一句を以て餞せらるるに依て附記す曰く、心せよ六十余州 ほそみち

一、晃山

七月十五日午前五時発の汽車に乗じて南行す西三の宮辺我が送
り人為に停車場まで来る艀舟の桟橋に降りて艀輪船
電して過ぎ所短長亭驛に熟食の必なるべし別に面白きこと
なし、ぐ天色や曇り高山列峰の雲烟の中に隠見する様
趣あり光る栗花香裏物風そよ吹きて轉々征衣の薄き
を覚へ、流石に指思して黙然さらむ山桜津(那)駅に宿
す山岳時次流車に乗じ宇都宮に行く待つ少許にして蒸車に
上る驛を発ること三、四哩にて低上曰く舟上曰く今市、鐵道両側
は皆麻畑にして一線の街道に沿ひて杉(英)並木多し

数峰を過ぎて東宮に過る皆岩石より成り崖峨奇崎、細雨霧
を生ず有無糢糊の中に没し四顧茫々たり日光に着せ
しは午後五時、鉄道の完成に至る日光は停車場より神橋
に至る迄の間にして両側には旅亭復亭荒に日光名物の挽
物、鍛冶、羊羹、唐辛子、冨貴を鬻ぐ家など軒を並べ
夏日は殊に繁昌なる趣なり
午後六時より馬車にて楽宮に導者を伴ひ先づ霧降
滝に赴く鉄石河の東此一里半にして東照宮中禅寺湖に行く
別の方角なり、玄川に沿ひて中禅寺湖に達し車馬
は裏宮川に沿ひ上り奔流に沿ひて雪を戴く峰を遡る

滝の聲鏗然耳根を震ひ心神爽々たるを覚え崖石聳
壁へ横枠立ひ峙ち奇々は半空に臥虹の如く横ふ渡心を跨る能
謂神橋は是橋にして其音嘯道人を驚して此に来り渡べ
やすきを見て心を凝らして所思せしに渾砂大玉赤青の二枚を枝
橋となし其脊に山菅を生せしむ上乃ち活路を得て人公つて山
菅の蛇橋と云ふ

むばたまの黒髪山の山菅にこもり居りさまたげなくに人丸

今は昔年御鎖して開かず乗輿の始て備ふるもの又一橋を設
け往人の往来を通ず右折して行こと数町公園と称す樹を栽
植し池を穿ち亭榭何等の石知覧見て此の天然の美景佳境の半ば
なるから意味なき怪事を為さまる笑多く慣むべし此堤大
抵油料代として数年の後は離宮的のものとし結構せられむを望む
右只皇室御下賜の恩恵来世に伝へんと年代なり山間の路
は先年霧太子半朝の折修繕せし由にて悉転もや大なるが所
由盤礎し概して上り坂なるに岩石少く歩きよき代に滑易
し両側は皆灌莽にして樹陰翳柯を交へ蔭を接し雨まで
止まざるを以て衣履湿しく為に沈溺し漸にして山腹半場の処
達すこは東方眼界開き奥谷の眺望・船岩の連峰を望み
風景佳なる由なるか走馬沿道して一帯なし来る霧
降るふらきるに泉聲岩石を震て雷鳴の如きを聞き凄し

きまでなり。こゝに華厳の滝あり。滝の高さ四十丈、
広さ二十丈。望み得べきは大霧濛々
として山腹を籠めらんば一望山と水もなし。華厳の
ありさまは曲折数曲絶奇嶮峻泡沫飛散
測り知られず。恍惚の憂を生ずること尤甚しく
滝は高さ三十丈、幅十間一隅して高さよりて流れ落ちる
なり。潭中に注ぎ、珠玉を散じ、雲霧迷合す。蒼々たる雄偉と
はいふべき寂寞奇絶にして年すでに宜秋の声、耳を驚かして人
語を聞かず。心胸多時、衣袂濡ふ。及び帰路、暗々
夜雨蕭々として樵溜潭に響く。夢魂驚くこと屢なり。翌日中
の奇勝を探り尋ねんとせし。此辺、いと気ぜわしく、岩間地ず

ず雨まで歌まで道者を伴ひ東照宮、二荒神社、大猷廟
を巡覧。その有様、こゝに述べ難き筆舌尽くし難し。日光山
の名所旧跡は日光山案内記に詳細なり。詳細の説を
略すること、旅宿と同じ。宮に前に張書所あり。拝見料として三十五銭
を納む。其物産物など見、高価なり。やはり無駄一銭も費さ
ずして金は無用なる。金は無用なるかな。俗の縁想のなきを丈
なりに対し、少しも心労せざることなきなりしかども
其壮麗の有様は、ずいぶん言及ばれわ、俗に日光を歓ぎ
ば結構の語をなすべし。至竟、社寺者にして実
に日光中の壮観なり。抑も日光

の山は天工の美の霊を鍾めらるる者にして之れに人工の美の粋華を
集めたる者は実に此社なり到る処金碧輝耀丹青絢爛極
極彩色を施す其細緻精微なる筆力を
者き所なく見る隅々裏くまで同じ枝工の妙を極めたり
鏤刻の精美を尽し過きたる惟任に近して雅なる所
しなり陽明門は流石に此の日歓して飽くことを知らずとし
暮門と称するに大いなる他は趣を異にし楣桁の木材
彫刻を加ず彩色を加ず彫鏤の精緻巧麗なる人工極りて天工
錯まるに近く果美術の粋を集めて此一門に止り
なる石鳥居の構図の隠約して動するまま

知らず何等の妙趣ぞ
時に十時道者と別れ路を同じ合満の淵にいたる大谷川の水
集まる深潭をなし両岸の岩石皆奇絶臥する者は虎の如く起つ者
は豹の如く石岩極なく急流其間を衝流す背に一巨岩
峙つ其勢鬼斧以て劈るが如く仰ぎ見る不動の石像
を安し岩面に天然字体模糊蝕損して読むべからず
傳て空海擲筆の所業左岸には不動数百軀を刻し
遠く望めば五百の隊を組みて整列するが如し
そは少し大いなり裏見滝を向うに一里余の道路
崎嶇石路を登ること十丁ばかり両の高に新泥滑りやすくやや辛難を覚

四瀑は怪岩の半腹より高下し高さ丈幅二間傍らに二
小瀑あり相生とゝび布引とゝぶ瀑側に不動の石像あり此辺龍屋
寺唯ゞ瀑布の側面を見るに過ぎざるも漸く進んで岩壁を
過ぎ怪岩の下を辿れば背面より瀑を望むを得るに故に裏見
の名あるなり
此より渓流を渡り清瀧村を捷て中禪寺道を歩む牛王陵を経れ
ば馬道し村を過ぎ此より上は山路険峻乱石崎嶇として描けり
四囲の景色頗る眺しく峰巒環合樹木陰翳雲氣蒙々たるも
雨斜に緑衣扶を染むるに或は羊腸曲折風光百変して真に
仙境の趣あり深澤の茶店を過ぎすぐ数丁にして紫峰に出る桟道

険危、其状いうべきこと猶ほ白刃を渡るが如し 終に陽て遥かに
方等般若の二瀑を望む景象殊に幽雅なり太平と称するに
足り四五町忽ち道を轉じて左折すれば華厳瀑の上に出づ
崖を下りて半腹の亭に憩へば此処より下瞰す瀑の高さ七十尺
幅倍加精色の岩壁猙獰たる間を一水迸出し奔騰澎湃雪
を踏み珠を跳し嵐霧を挾み潭然として毛髪を竪しむるの
概あり華厳滝より来たれば非らずんば能く是の如くならむや蓋
し瀑流盛なるときはいとえと想像せらるゝ余が見し折は太平墨として
水珠なく水勢遅緩なれど上の方にてはもろ〳〵処として漏下し二
條六七に岐れ其間に岩角を畳し其上に青草の生ずるを見る

かて数段を傳ひ上の中瀑となり潺々然として流れつゝ
ゆく真個白練を懸けらるゝが如く屈曲銀絲瀑の一部分を見るの想
ひ、瀑の東方三丁間を隔て、懸崖峻峰等る危岩ひ羅を
たゝき船上より頭を延て其全形を俯瞰すし或は又傍の
細道ひてとりて瀑下に至べし但し路奇險なる由いと渓底の
水霧濛々たる岩蘚と苔ひて足を上の発に湖山第一の神
ひ古詩篇を刻す、何法極元泉意を極め韓愈鮮を摸す
るものと云ふ中に快然恒能慶戰の句ひ佳ぶ人は遥に此
趣を見る得ずして石利なる又奈何せんかなまり他年梅
雨の頃渓水浩漲の節を計りて再遊せん、

行こと数町特に中禅寺迄なるべし、豊樹果て一片の湖光望
み烟波浩渺の趣を極む中禅寺湖は南湖とも幸の湖とも東
西三里南北一里半周回凡そ四里湖面の水清冷して拭ふ鏡の如く之に
臨む峰巒を以て絶景言ふべきなく之を相根の盧湖と称
ぶる湖畔に住む富士なるを感ずるの先ず中宮祠に参詣し
神主を達ひ男体登山のことを問ひ明日登らんとて湖畔の亭に投
ず男体山は此より三里西方にあり一国都中社二荒山神社にして
より登る者を表山登りと云ひ大真名子、小真名子、女峰、赤薙
等を登る者を裏山登りと云ふ又日光町の西部より表山道を分れ
裏山登り慈覚の道を辿同じ元表山一の別所と称し社

勝野の長浜町に泊し翌朝赤山より登る。掛渡山と云ふ毎年
月番寺より番頭出て登拝の神事を執り行ふ故此時は殊に
賑ひ彼岸衣を着まとひて何と講と唱へて信者先を競ひて登山者
絶すと雖も暑しを忘れ湖畔の眺望を縦に画く樹木低く風
物眼中に収まる東の方半色拡がる陸氣掬すべし況や雨の後に
晴れて大湖の水渺漫として一碧鏡の如く四山の蒼翠山風氣
よくよく子規聲を惜めて飛ぶ如きまさに一層の趣あり松に宿れば雲
烟罩し湖光山影悉く蒼茫中に埋没し乾坤氣望を
白く大霧水を蔽して湖波全く見えず時に高舟行き櫓聲伊軋
として水鏡を破りて遠く何者の風流漢か

獨酌書吟嘯興を導き夜半時頃微震あり山鳴り動く
十日曉起雨降り霧まず因て男体登山の行をやめ九時船発して湯
本温泉に向ふ杜鵑老鶯相和し鳴き吟興尤も起るべし
道より高の原を過し堤塘あり此地中禪寺湖に流れ概
して林間行て平坦なり時し細雨霧ありて緑陰書寒く白雲
曠茫として湖光煙るが如し湖の畫く処龍頭瀑あり言はば是
流の道なれども霧降裏見の点在る者のごとし高きを以て
岩壁四処に迸て時に潭を成す湖に注ぐ白絲を垂るゝ如く
是
道じて者傾き故瀑の全景を尽りて之を取り奇景を窮め

行に一小橋ありて渡る此辺花は手野にして草徒路を塞ぐ果て
正午下に赤き一小茶屋ありて露を拂ひつゝ立ち寄り衣袂を湿す
行くこと森林中夫る凡そ一里許にして一小嶺あり之を越ぜば又手野ありて半
里許にして又一山ありこれ御猟場の標木二三ありもはや湯本に達すべき
頃と思ふに六方と山勢を考へたる全く路を失ひ行く者少し但し嶺
に伝ひ辿る要路と覚しく馬糞破鞋などに推し然れど
路行人に達せざるに日暮れ遂に之を決し引き返し
大迷路を出で午後天の暗くなる時夫れより草鞋破れて全く
跣足となり漸くして蔵王温泉に達し仮に旅にやすら
ひ明日を待つに石動に帰るとの事なれば漸くして元の道に出て大
路を助けて戦場ヶ原を出づ原は広けれども野草茫々として茂りやすし
立木の処々寂けれど林立する処多く澤地なる花小さき蓮子花心字
なれども外に名知らぬ野花の烟燥たる日見れば紫色のしを
み蝶の多きを数へつゝ一切り付きて原を窮に手折りて一息吹けば
数十の小蝶朝となり飛び起つ様真に面白しと覚つぬ此より湯本
に向ふ夫れより遇ひしも此辺茅舎西三軒ありと覚ぼし湯桶の識
見る尤も奇観なり先きにして一小無ありこれに坐せば全景を見る情
べし高さは二三丈ばかり就中に寸きほど傾いに復軒大樹文長民
の撰びたる碑ありこれを評して華厳の雄偉と異見の奇崎とを兼
ねたる者なし一言以て之を蔽ひ雄麗の二字を以て之を名せり其果して

寺を浮ぶるやうなる岩は隨分一回見るべし王翰が扶桑傳記には華
巖は延長、背觀は幽詭、龍歌は廣大、湯湖は雄偉と評し
如見もまた角まる雄壯なる山論なかるべしとて悪所にして湯本よ
りいる地は海岸を辿ること四十人後に温泉嶽を負ひ前に湯湖を控
へ湖周里其幽邃閑雅なる寧ろ中禪寺より勝たりとなり遂に投
宿す余が掬飲しは乳湯なりて少しく酸味を帶び臭
卵の臭ひあり初めは無色透明なる由なりが浴槽中に久しばや白濁
色を呈す三槽ありて略作無の趣を呈す浴を採ること三回此日雨降り
まず質の水の滴ると音を相和し深く寂寞たり菖蒲老を鳴
らず恰ことして寂寥なり行く此間の情孤仙寰を似たり

十四日朝早起浴を罷り食すると雨降に出發す白根山に登ることを欲せしも
雨やまずして止むしかして中禪寺まで来りしが乱雲同駁し西天悪く
蔚然藍色なるしも東方のみ少し雲霧を開き中に白根山を望はしきも只
一しが黑髮山のみは雲煙舞ひて美人髮を乱すが如し一たびは登山せ
んと思ひしも三里の峻險雨後なれば出石滑りて登り難かるべく又行
ちやめ去て定命寺の路は頗る狹く湖の東岸に沿ひ熊笹路を塞ぎ
大樹森として晝暗く冷風一陣木末を拂ひ殊滴斜に飛び衣
襟濕ふ是非なし陰愁崎嶇となるに少時休まず中禪寺より
一里許にて人家三四軒ある湖岸を出でゝ何處とか言ひし其名今
は忘れたり湖に白帆の一二三見る近くは櫓を推す舟の跡を曳きて

行きて陸に上り足にて里髪出やすかりし少し休憩して
舟に乗輪は前に比し甚だ廣き山路にして奇絶特に甚し半
里許にて鶴ヶ瀬に達し此辺天風の狭を押へ迫り冷氣體に
満ち覚ず一聲快と呼ぶ此辺流に沿ひて溪
流を遡りて噴泉となり多湯となり屈曲船筏極まる
山は高く秀山にして草の多く下部は岩壁となり蟠曲の溪流之
を繞る覚束なき一橋ありて其上に立て眺むれば奇絶極まなく
于秋保駅橋を廻大しきけ地に行こと二里にして三尾に達す
路は稍色の絶壁の半腹に一路を穿ち者にして直下数千仞水聲喧
砲雷の如しこゝより水を付きて壙岩下る其二分を見れば煙突

幾百本となく立ち昇る煙には白色あり黄色あり赤色あり黒
色あり其他種々色なせる煙生じて怪雲となり其臭数里の間
に満ち物音のかしましきと蜂巣を見れば火事場やうに覚ゆ
三尾の町は先年焼失して假小屋の建ちあり今猶ほ整頓
せず墓地など赭山の樹麓に近頃新しく埋みしの名を記
せる板のたゝにして無数あり凄寒を極め人をして悲思を起さむ
峡熱俗及し置遠の山は皆禿山なり壙山間の谷に木を伐り畫
せし板なるべし交通の所なれども今は小鐵道ありて日光花輪
とに通し日用の物品は皆此二所より運搬し来る故に物價甚高
して泊復勝にひきよしにて又炭夫多き故至る処宿屋なりとは

達賀を辞する私富子澤山畜ひたるよし聞き銅山峠を
物しらんばかりの所に泊りたは士君子の屑等所故大道の寸法をきめ
今日はこれより九里を歩行間こまりを漸事にて前橋に越えを欲
しかど宿駅を多きて行に町のはづれに伊申山表に此より重百八町と
しる標柱ありて傍に高崎より犬傳中に書くる名山のけしき見
せんやと好沈思しかば此天気書(白白かるまじければ他日せんきて切
て)事程来りしに又木標ありて伊申山道中瀧を経て二里三十町
と記せり此まをりて往意却て並べからば且つ此時天気書
晴光やうやうに開れ何やらむ望有りかに見えんば立寄を決し
其路を問ひつゝ行に路は鐵嶮にて仮に思ふ程に伊申山

側の墻垣を達する者なるべしと行こと一里許にて人家盛にして市
をなす所にて小瀧を行き窮むれば又墻山にて分岐の見えし
足尾の黒雲ことなし門を事を從に問ひ伊申山を行路
山のうしろ折から山の方には黒雲満ち〳〵将に雨降りしきなり
彼是差し行かむを欲せど今日天気怪しき故一先此宿に泊し明
日の模様を行べしと余は武びが天色悪しくなりゝ故道に
うきかすことし此事しきりしまして坑内を見物して出て行に
果然疾風吹き迅雷震き猛雨大に到る程急行すれば道
路の悪しき且つ今日はなく彼なれば又二里許なる所を知ぬ
怪しき所の家に宿りしまるに猛雨四時前なり

二十日、昨晩に出つ降波漲甚し雨漸く止む七里にして高
こうしの宿に着す路は平に波良野川に沿ふ町のまゝ前年大火の為に焼
人かけり我が留て見し昔に似ずと町より一里半停車場に着す時
猶早ければ酒酌みて待つに漸く汽車来る車窓
より見れば赤城の山は雲霧にまぎれ半腹以下を露出す往日
振袖のことを思ひ出れば清水の夢の心地するなり二三の驛を経て前橋
に着す車を下り馬車に乗入れ啓せしに帰るものなしとて往き合せ
ば往方なくして歩むに日暮れ雨大に到る大難渋せり利根川
渡り水聲のけさまじきを聞き一里許の松林の暗黒寂寞たるなかに
のぞき夜十時頃沿道の番人に投宿し先つ一酌して疲労を醫す

二、清水嶺

二十日朝霧夜雨僅に晴れ赤城榛名の佳山は雲煙縹渺
糊たるに似たり概ね風なきて東天日光を放ち一道路路泥濘
滑澁極まる歩行甚だ艱難三里半にして新調草鞋の鼻緒
を絶ちぬ止を乗てはき代ふる止正を爆ざるを辛うじ力根
川は進て輪せまくなりて以ての大山岳の其下際を流れて
露立し奇峰嶮立せる様宛ら小郡馬渓を見るべし然れど
も次第大なりて其の上石場り出す為め爆大なりて破壊す故
数波には此始末も皆無と帰せんか毎年老翁の長年
をかついで渓の奥を尋ねて行けば香魚釣と大なるは五寸位目

岩部の茶こやり蓮津の茶屋善光寺を拝し元隠妙高を仰ぎ
て登り牧宿に行かむとせしに今は日数迫らねば直ちに長岡
に出で牧宿に泊りぬ　一里許りして井上と云ふ所あり一
店に投じ酒数杯を飲ませ出づれば暑熱燈の如く
日光赫灼として土石をやき水聲の潺湲たるも唯暑威を増
すのみ覚へず一酸地収まるを待て確氷峠を越ゆ　よれの目に
見つゝ我ながらしか覚へず行こと三里許りにて暑氣遂に堪へ
がたく且つ今和泉の所に三里となりたれば急ぎもせずして逍遥の
樹蔭に一睡し二時間余を費しやがて出づ刀根渓上の風光
甚だ好し路に大風搖の邊かの杖保取搖るが如くなりけり凡そ

此邊み車に峠熱漸く迫り田畑もなし　先に湯檜曽より
着して投宿す此処は石澤なれども温泉なり　此夜疲労を医すべし
相又独酌す　窓邊の蓮を揭げて望む　夜気蒸暑にして峠樹園
を流し欲月林を射て殺無味なり
二十日　宿を出て坂に路漸く狭くなり川の音も水原遠きや
うなり　路傍の藪の蔦ばみたる葉の中に紫陽花の美き咲しを
見て美し路に数軒の茅屋あるのみにして岩宿と云ふ所
やがて歩を止めたる後の道迂曲屈曲し漸く登れば崎嶇極
下には谿流深くして緑樹そよぎ鳴り萬壑雲深しして鶯聲
雨の如し　沖を見れば前峰天を挿み其陰の処には残雪猶白し

是清水谷にして高峻なること以て想ひ見るべし嶺上につきて收は
遠慢なる坂路にてみね上につけり凡そ四里半にて茅屋あり
こゝ小なりて路として略前と同じく険に岩石多くして歩みがたし嶺をた
ばね清水谷村にて又行こと三里にして所上高遠に投宿す
前橋より此に来る二道にては清水嶺にして一は三国嶺と云ひ清水
の西にあり甲州に遠き代りには餘りに険なるべし三国の方は知れ
ども清水は越野の要路なれども人多く通ぜず但つ亭驛
陽に寂寞なり清水なる山は春春の比にて其の時なれば
各戸戸鎖し旅客来り過ぐるも休憩し一椀の茶を
請ふ

三、信濃川の舟

二十三日朝七時半舟の準備整ひて宿の裏なる埠頭より乗
るべかりて棹歌の聲いきほひ漕ぎ出でること一里半にして休み
新しきに積荷をひまどれり此邊水餘り深からず概ね急流
なれば舟行大いに快なり今晩より初雨しばしば降りまきり
四顧蒼茫として興色行動萬疊の青山雲中より聳立せる佳境
淡濃要一段の活動なり
奥見人他の船長又行儀無して船首に坐し叫ぶ人事
其聲殊に奇なり舟子等は唯だ舟歌をうたふ川邊の粉屋
屋合歓の花咲き出づ

我と男のこれも歌唱へつゝ行きまに何となく面白きに一句を吐出せ
左老人感ずる中に人の俳句より抵觸なんやの恐れなき懷中せる
五百題を出し出して撰せしに果て「船戸の妻の冨欲かねぶの花」
と云句は無類なりの名句なるべけれやきしき所を言ひ
出づる中に捨て難く身境に在れば成程と感ぜられ
小松小千谷などにて舟をとゞむ田舎の女の魚の事やすく酒、餓飢
などの賣りに来る義束の聲宣業耐やべなし
すべて四三人を舟をつけしに乘客漸こゝに增加し合給計五人
となる故敢自と云程にはならねど荷を多く積込みさるも
雨降りて蓬の上に出る能はるもの二原因により船室（と云べきか）

の中に充溢し殆んを立錐の地もなきまでに見あはは横堅る
者の餘裕なしかく今は、胡坐すべきみにして臀の痛みるも感じ後
する中にも席を奪はるゝの虞あり乘客中に一人の老翁あり
談しぶりの面白きに皆耳を傾け瘡痕面に滿ち眼つき種
の敏捷なる性を表はする男は信州邊の商人なり馬鹿ばなる顔
しる男が已より年長なるべきしけなる妻をあて共に
ぶり顔色憔悴せる若者のかゝる舟も酔を覚しく苦しげに
るもいのり頭すこぶるを未だ慢ちず艶ばなしに興
を吹へむを試むる有り二十位の覚束なき髭はやしことばつき傲慢
ゝ十二三歳の月代なるべし何ぞ山花の顔の半面に黒き何ぞ

歴然として見る処女性よく形容すべき疾雷を妖婦に車輪を
捧しうるとも云はむか村粧と濃化たかぎりとてこゝに
が辮髪の下目を病みて乙女なり何ぞ病みしかの男に
や遠慮なく頭を飛宮ふるまし疾雷の職人体の男の
大切坐かなて一隅に陣取る行舟中のきまとりしてなのし
妙見白岩の下を過く水勢盤旋して渦巻すこれ水流強に
ひろく雨後の新水漫として張り一望千遠の曠原中を駛る
時に雨正に駛みて陽線光を放ち林樹紅霞を帯ぶ長岡に着
し長生橋下に舟を繋く上陸して市中の一旅店を投ずるは
ときに旦二前半十六人の跡市に徘徊す此日実に余が生涯驚す

四　長岡附近の石油坑

二十四日　昨夜は我が書生にて毒なく延延中にのるを以て杯を引
て自分が炭し一壺の酒を酔し起き出でしも遅かりす朝食後直に
發し跡を同じ新町に出でり古人池田岩次を訪ふ長岡より僅三
里酒に對して同社教刻に宴彼は俗の道を問り異より尾瀬
峠を越へ千里越えかりしに一瀬して起ず事を使してかつて事又
跡に棲を採集せし甲虫を捕て同じく中に刺しなしに異
れ同居して書く粉齏し去りしかるに彼は猶ほりょうまたの氣象
とて佐渡行とて出づかしと云へと氣を毒を笑ふかなしもんど彼は余
が居に案内し午後石油坑より出て石油坑に出る

此遠地に於て石油を産しまゝ田畑の同りし後ず然れども量に
山に行て石油業を営みたりて大に進歩し数十の会社を設て
各立に搬出し山より採て長岡の所に運びこを精製す其外処
々精製所有り近郊数里の間煙突林立して黒烟を吐き時々
なる風箱のごとき音を聴らじき音色なり命名社は
此株券を発し長岡の市場または其相場取引の為に賑はし或
は暴富を得或は一時に失敗し盛衰起顛きてもきまゝの世の
きまや
新潟より凡そ重椿澤の先の山々皆石油坑の所在地にて天
平と称は弾に名高し往年半国某会社の役員等此会全

體を買はむことを謀りしに許さゞりしてやみしと云ふ帝国鉱山に
於て一撮の志外の雷掘に帰せしむべからず況人や此の要地をや
帝国臣民子孫百世相戒め黄白を眩して外人に歩居せしむること
勿れ石油坑は深き井にして百間より三百間に至る但新の両
式は旧式は釣瓶仕掛にて酌むものにして井中に若干の人夫を
を付き上には縄を引くの若干名と井中に空気を送る為のふいご
を踏む者に又若干名何か間を挽付けその力をもて深井中の油を汲む一交代二年餘を
経日に百五十間位を出し得べしと称ふ機関師両三者を汲
みて油を他に移す者西洋人にて彼等はかりきゝ利益りこと

を載せ合羽を着けられ其賃金は最高（是ぞ）にして坊主に
頭を剃り牛蒡を洗ひたりしきりなれども時には高帽子を冠
りて車を駆りて場こそ者なれども波みる油は樽に入れ合
羽を着せて長岡へ運ぶ往復七里余力ある者は二樽を負ひ日二回往復
得べし賃金一樽三十銭位なりと云ふ何れも其中には中鐵路でも布設す
るならんしすべて此辺油は強んど純粋なるものにして精製中
量を減ずること少しと云ふ山中油臭紛々として人を撲ち渓水皆油ぎ
りてきらゝ光り晩方にて又酌む
途中米山補天山を望む暮烟林塢を暗く高頃の水田翠波涵
風を飜り蛙聲風雨の如くして耳しく蒼光雨三尺を飛ぶこと高し

五、新潟

二十日、疾風屋を撼し天色晦冥風雨大に到らんとす今日は油
を運搬の人跡なる椽尾七堂伽藍を見んとせしが折柄翻て新潟
に向ふ池生駅より見附に来り独を分つ忽ちにして大雨来り徒行大に
艱難三里にして三條に出り渡頭の一店に憩ふ舟発するには猶時間
あればひさり酒酌み微酔して睡す三時頃舟来り乗ずる時に雨
未だ歇まず一天白濛々たり舟は出帆して漫々たる大江中を
行く其速力十哩位なり昼は新潟と長岡との間を往復する心地
風景別に見るべきなく進ぶ汀岸芒茫茫帆として風に乗じ
ゆきとゆき霧の中を過ぐるが如く遠処はすべて模糊たり

舟中一組只腰縄つきにして吉公威風凜々として恐めしき様なれども彼の子が使者行とて只總音もなく
る之を管す特に可笑しかりしは彼の子が使者行とて只總音もなく
て相伴なすことなして舟中の人悉くして笑の聲を絶ざりしが
彼等は皆酒酒然として呑気なる者(或は横臥し或は頭を寄せ
いつも出しなりを眺めなすもまわさいと自ら曾し或人耳語
して賭博の者なりと云隠々佐行をすみる如き奴と見へたり
こゝ対馬新潟萬代橋下に遠し舟を棄つ宿引の聲十月
縄きまいなり職氣なるに沙きたるも故直ちに父執高橋
氏を訪ひ杯を傾められ大酔し家に泊り翌朝なれば旅宿に送か
れ車にて送られ登楼に始へたり

二十日佐渡に航する舟を同日一体は毎日楚々たるが陰
の天氣悪き故なるべく出帆なるべく出つるならんと云に滞留す
午後市中を散策し日和山に登り元を此地に船是堂を設け商船
の安を遠望して信弾を為す東北が極此の砂丘に寝りて
なる矢張り何やら豆屋に登りて眺望すれば西に佐渡島海霧
の中隠見し東は西海の山峰蜿蜒書きべく北は海と同じて烟
波渺々帆影其間に明滅し正に林松斑駁して海色と相映
す形容し来りしばらくの間も実に是は是は只海上壮
氣強に多く濁浪空を排し曜々沙を捲き極目茫々として
更ひまなきなり

路を轉じ南禪寺神社と称つ社殿清楚にして高雅華表堂
々石梁横はり境内には樹木鬱々として茂り信水碧澄り風
色やゝ美なり此辺皆公園にして梅櫻桃李其他の花卉を植ゑ西
南には圓通社あり立登れば全市眺望に開豁彩雲峰の二
山を望み信州其前に横はり極目の平原目睫の中に在り
夜又散策す市中に在て本流溝渠數十あり処に小橋を架し
江上両側に柳を栽ゑ夜氣冬虫花と共に綾乱き紅燈隠見する
さま大都にも勿論書生とは法なら思の女子能謂七十橋
なる者は是か新月眉の如く紅樓絃歌の聲一半宵絶へず
溫柔風流の御進か十方の腰纏鶴背の仙格を識む者で

二十首今朝舟出帆せんとせしに別れを通知せし無聊樣たが
之家去秋隠暑熱蒸すがゆしに晩に丹必ず出べしと云ふ欣
喜堪かたく午後に時頃なるも舟問屋より人を出して去を迎へ一時急
に出で急ぎて赴きしに時間餘を過して收束せしに来りしこと
ば間合ふ筆なく埠頭に立てれば流笛一聲舟出せり此時感慨
限なく然りとて此時に出し徒に泣涙を攀情や云
なし次の舟を問ふに明日ならでは出ずと云に又一日を待つの無聊
に耐かね佐渡行を發す此堅固何の舊怨なりて乃
公子事を破り慢同を耐へざらしむ所に尚方斬馬の劍を得
非事の無き高らし首足低を異にすると得む

佐渡は新潟の西北十里の海中に在り汽船なれば四時間にて航行し得べし、かの有名の佐渡金山、順徳帝陵、資朝墳などは皆この所なり、而して往還さ、四日を限りて辛うじて新潟より帰り得べし、新潟より佐渡に渡り、北海を陸路を一周し越後より此土を航せんと欲す、旅程を殺ぐの数日前一夜夢魂飛んで佐渡に馳せ、林業を視察し、又金山上に行き神仙の心期し、此快事は黄海の華山の游に比べ、其小異しむに足らざるべし、因て杖屨跋渉し幻を化して実ならしむることを期せしが、彷徨の一回瀛海の危険より今年三月非十六日志を達せんとせし心緒、見の設を誤りとなり、徒に海天を悵望し、髣髴の間に隠見するのみ

小越北

二十日夜雨正に晴れて余氣洗ふが如し、速やかに起ち萬代橋を渡る、橋は信濃川に架し沼垂に通ず、橋長四百三十間、幅四間、水面より低き里数常に河畔に行き地平濶にして芦荻蒼茫、此間又小蒸船を通ずるかな、水原まつもとしは猫午前十時二次程也、偶ま市日にあたり喧騒極まる、青山正治を訪ひ在宅、居合せて某旅館に拉し、相ともなれば彼自宅に来り迎へ、予を其宅に館し酒を置きて暢飲し歓談す、其友坂井某又来り会す、詩稿一巻を出して余の雌黄を求む、夜又雨ふる

二十日雨未だ霽れず、具竹内氏等来るあり、よし同宴に余が

行を後にして一日滝沢に帯す坂井某招しうる詩稿を閲し半日の力を尽
して漸く成る門前に鄙湖を臨む池内俗子外城堤と称す雨霽れて
楊柳烟を籠め荷芰香を漾す池周弦七十町風光必ず
るべし午後三時頃芸芸の人川を渡り熟歩すれば竹内宗兵衛澤
村の三氏なり五人相見て喜悦揮かず酒を置きて歓を尽す一室の
雨静にして読正に濃に燭を乗りて更に杯を上す
三十日朝九時後竹内宗兵衛澤村氏
の二氏は十二と称す同じ舟に乗じ澤村氏
の住せしに其宅に赴く岐を臨みて秋を分ち冬東西に去る
皆天俄に霽れ驕陽赫々暑気燬がごとし路は一直線にして左右皆田畦南方近く五頭山の巍巍たるを望む午時新
潟田に達す未年二月二日大火の瘡痍惨憺たるを見る況
假小屋未だ立たざる時は瓦礫堆積し木の直立す
るのみ鄭侯流民の圖を見るの想ひ四城地は五穀を病院
とせり郭外練兵場射的場ありて一里にして加治著
すなわち小は名代の清水ありて清瑩玉のごとく冷冽骨に徹
す加治川を渡りて澤村氏の宅に入る家人驩待懇篤謝
すに堪たり本に名物の饅頭を供す其質粗糙にして塩氣
多く玻璃盃中に盛り水を注ぎ糖をかへて味美なり
加治小学校を訪ひ生徒の教員金を迎へて飲む半高山森松
学校に過ぎ今年の稲を刈り余に贈る余年無事にして利し快

談数刻に亘る氏年三十余温良恭謙禮に篤く露骨さを君
子なり曾て余が名を聞き歌墨の意を致す坐中の人皆味に
先生様を慕せる鳥澤余の年少糧才なる何ぞ能はざして三十富之
や具生来野性未だ改まず轉々脆爾こ心を傷ぶ坐客又
扇面を出し余に詩を書せんことを求む余書を習はず拙書
を辱し先生此を見て笑ひ酒氣勃々を騎りて無遠慮を若干
首を書かせり松澤村氏之家高山氏を客として其家を
還り宴を設けて又酌む快談縱横覚えず杯を傾る此日酒
興に乘じて詩を作ること数十首あるべし要するに戯語冗長
なれども記臆中に存するものなし

先生様鼻梁高きこと幾十丈

七、海村浦

三月朔日雨晴れて暑熱人を侵す九時頃出発して先づ
午時黒田川驛に達す此間四三の小丘あるのみにして路は常に平
原にして青田万頃目驚く遠山千疊翠色霞を帯ぶかて
村上驛あるは午後奇乃技宿す こは三山参詣の要路なれ
ば旅客など多く賑なり 此日行程弱九十二里
翌日朝發九時頃波を發する舟にて先づ夏方を出
でて里に乱松間の遠路なかりしが一天俄に墨の如く流しと之
がく空模様悪敷危険となり旅客の人々も舟を乗り合せ
て松を辿り俄然大呼しよかれ〜と心ひ牧方を引きかへせり果

せる烈猛風一陣吹きすさび白雨矢の如し陸に棄つみかけし女
どもはてふてめきて駭せかるる様俳画中の景致なること疑を容れ
ぬ かくて疾走して渡波に入る今日初め海付浦上の勝を聽すべく舟
を飛び綫地を尺蠖し此天氣未だ興なるべく乃ち風
船を棄ることを決し海船問屋に赴きて切符を買ひ猶ほ二時間
の待間なれば海邊の茶店に入る店主未だ来ず窯煙焚
雨すきまじくなりて遂に汀に舟を引き上げる漁夫のかけ聲
高し乃ち戸を推し明けて荷物を卸して休憩し横臥する
こと半時間にして店婢兒を指して来り茶を沸して供
す色色の笛聲ひびき船影港に入る時に雨益猛船

船を棄てゝ狂濤山の如く舟覆ること數回漸く本船達
して之に乗ず船底の客室は隨分充溢せし故船舷の方甲板
に坐して徐ろに還風光を眺望するを得たり
舟行に隨ひ沿海汀岸の奇景漸く尽つ すべて断崖絶壁
にして其色赭獰獰のまゝなり皆下部を海波に洗はれ石
塊斬然たり奇岩怪石散在し巒を出し逆を出し洲を出し嶼を
出し洞を出し澤を出す海濤澎湃之を衝き銀山頽れ雪峰
砕く其壮其快筆紙のよく盡すべきにあらず簡略に云へば
菖蒲田辺の海岸の長汀となりて数里に亘
しかつて見るべし舟中に白衣の湯殿山参詣者甲乙山邊の擢

に熟せしものを見へ景色を麾き指點して其名を呼び得て然ら
余は默然として傍聽し少なからざる利益と愉快とを得たり知
人や天變奮を以て去人を待ち雲氣日に宮に滿ち波光暗海
を蔽ひ巨鯨躍り炬燵去るまま晴好の者と比して一段の
奇觀なり
此浦の奇景は馬下より宿屋に至るまでの間にて東の鼠関を
以て最とす馬下は深迫谿北之し此地を峠路の險を為に馬を
下り鞍を樹上に置きて去り此地名を呼ぶ事鼠関は
義理記に見るナ爰が関にして古書皆夜珠の宝を用ひ街路の
傍鼠浪点の在る所を古関址とす其海面には雛天島所巨

鼠関雛天島は普ねく世に知られし勝景の地方を離れしこと五十余年を以てなりしより見へを自然なる岩石なり雛天島に小堂あり前後左右雅なる岩石なり景色なるべし

岩直立十丈長さ三十間上に厳島神社を祭る其左右は和布島方の島横たわり島守の巖峰皆奇峰峻峻風光殊に佳なり晴天の時は佐渡島及島を水天髣髴の間望見す東には温泉嶽の峯を眺し得べし羽州第一の絶景なり然れども未だ甚だ有名ならざるは豈に僻境なるの故なるに非ずや余は充分奇景を探ると得ざるとを深く遺憾とす

風雨暴俄平甲板に立ち飛翼を以て心持ちくなり正に微雨を
潮較劇しく船体動揺するを以て心持ちくなり正に微雨を
覚へんとするに至りしが急き船室に入り衆人相坐の席に入り
して坐すること暫時にして一陣の風雨を催すべし但し風

老の蒙令を同却せしは又一しほの恨なり
午後二時温海に達し船は碇を投じ待つこと暫時にして船来り
ず船は風笛を盛に吹き立て西三回廻転をなし将に去らんとする
の勢を示す漸にして船来り之を乗る一葦浪山の如く立ち舟
為に撥舞し中々進まず且つ汀岸芭蕉翁く一撃すれば
舟は全く砕けて乗客の十数人皆水底の鬼とならんか如き恐懼
戦慄幸にして岸に上陸するを得たり少時休憩して湯温海
に向ふ時に雨益暴疾風怒濤を飜し行歩自在ならず温海の村
を去ること七丁ばかりにして故に賓温海と称し一名山回に行湯温
と称す温泉と称す相去ること僅に半里と称す

八、温海

初の水原にて竹俣氏を見や余と語る孤峰子の温海に在るを聞
き其旅宿に行て訪ふ偶在宅待つ少許にして帰り来り手を把り
歓び余未だ彼を知らず然れども金蘭同臭一見十年の知己に勝れ
り彼こ行る巳に旨酒無餐を出し余に宴を開き杯酒吟嘯
夜半に至る雨遂に止まず
翌日雨屋に歇みし猶晴れざる故猶一日を淹滞す孤峰齋
宇とこの報徳記全部六冊目録して讀了す夜に酌む孤峰及
人数名半ば俱に詩を談じて夜を明す抑温海の地たる東
に温泉嶽を負ひ長く立て山を隔て海に接し温海の中央を流

九人家千年戸浴場を繞ぐりて居を構ふ温泉は硫黄泉為
し微濁無臭浴を操る孫に快適なり

附

温泉安舎青琴詞兄見訪限韵賦詩　孤峰

相看並笑足歡情。虛禮不須勞送迎。入眼雲山秋縹緲。
捲簾烟樹夜陰晴。應酬吟社風花秀。好逐騷壇詩酒盟。
溪月多嬌佐佳興。清光先向座間生。
金蘭同臭故人情。山榭閑緣偶爾迎。一牖燈花尋旧雨。
半簾星影問新晴。先侵酒盞從杯法。如布詩軍訂墨盟。
亦是風泉我曹物。滄浪和夢枕邊生。

遇音幽谷奈何情。人與蘚顏好笑迎。山路霧沈林影暗。
溪村月照笛聲晴。燈花拈句三杯興。意氣論交一紛盟。
破帽敝衫疎世態。江湖滿地西狂生。
浪仙漫擬養幽情。且喜星緣此送迎。蘿閣蕭蕭秋氣動。
桂衣颯颯月心晴。青山一眼皆詩料。白社攢眉亦佛盟。
枯坐深宵人影並。一燈雋味話前生。
分榻山房聽夜情。風光無裏好相迎。鈴隨密樹流雲白。
檐角層峰霽日晴。瘦骨人先追鶴侶。仙裙客已了鷗盟。
壯遊知爾詩囊滿。唾沫皆珠萬顆生。

温海安舎次青琴詞兄韵

稜稜風骨略相如倒役好縁楊子廬唱和難當詩律整
江山莫使酒懷疎一川峽影殘煙過千樹秋聲涼雨餘
只儘清筵月相照吾儕襟腹本清虛
由来丘壑適吾儕洞裡幽情麋鹿偕松石靈符數爾磐
海天逸氣與時乖笛聲吹暝雲千嶂梧韵敲秋月半階
潦倒杯中感奇遇驚人高談止襟懷

絶句二首舊作

柳闌細雨使人悲別話纏綿步自遲出岫閑雲固無迹
慇懃勿復問歸期
絶無塵土點征衣行盡松蹊晚扣扉誰識個中幽潔味

鈴窓半夜夢依微
他日彼岸会作しる温海竹枝数首有其稿未今見ること可惜
有言所改又云して北の孤峰と命ぜ行こと里立岩を字
いふる奇岩新立削るがごとく峭壁数十仞其上に老樹叢生し
鶴鵜の巣ありと云ふ又俵岩と云ふ紋理ある岩石積み出すがごと
遠海岸概ね巉崖にして海水浸蝕の跡歴然たり皆天霧して
酷熱人を苦しむ海天碧空毫も波なく明鏡を拭ふがごとく遠に
粟島を望む真個白銀盤裡一青螺を見るべしこれ
古歌に夏なれど笠置嶺にふる雪と云ふ道路迂曲し其
間漁村延々の趣在るのみ初て島海山を望む海濱を漸

扨て日は一面海深きのみに海上の岩石は高く高くにそびえたち
かたち奇なる海上数十間の間を
駅像石鬼の樹樹天物荒誕
の間石柱石鼓石獅子石象
石猿石沖の鯨石鶴の鶴石
行ふる物の形に似る石限り
西を遥に見る目も及ばざる
の更なる大海原立ち上り浪
頭に雪の如く東の方は岩石
連りて剣立ち山の林の如く

隆起して其頂尖はげに美容峰の如く三滝驛まで休憩
して食す孤峰其宿駅まで愈〻疲労し殆に
乗車を辞し徐歩すること暫し午睡一刻醒むれば
二時近し直ち殺す孤山間に行き全く海と隔離し清陰地
涼風大なる故に暑熱を覚えず少時して又平坦
なる処を出で四時鶴岡に入る孤峰全く詩宅を設し夜佐藤小
吉君を訪ふ又高山林氏帥氏を訪はむとせしに湯殿に赴きし由にて空
しく帰途を通行せ

此夜月明天色澄渡清風樹間に起り爽気秋を含む島海を望
む雲烟模糊雨の兆ありて
はべれば日本の内にかの
恩師の書を以て快晴の兆を

九、羽前三山

曾て快晴即羽黒の行者を出し孤峰に達し行者を其家に訪ふ途に
島海を望む雲霧漸く薄し紫雲加日に映し彦歌嬌然
三山を初めて面顧列嶂皆睫前に在り午向山に登る路
三里半にして三山宮に出る
の宿宮内せる直ち月山に向はんとせしに今日羽黒に宿る
朝早く出発せらるべしとの
一老婆を宮内として羽黒にのぼる隨神門の少し前に所の老婆
ふ先の老婆自ら行を設せりとむ所の少女を代りとむ
拒絶せ何処かかくれむ遂に出て来る老婆は已むを得ずして

寺内す路側には老杉直立し清陰四郷を覆ひ水聲深山にて
鳥語皆こゝに是より磴道すがら豆指凡く仰ぐ道に数宇の小祠の
り秩山橋は秩川に架し其上流絶壁の間より飛瀑を懸し惜むべし
寺の水枯れて此の奇観なし唯こゝ其邊珠に冷氣の肌を襲ふを覚へり
五輪塔下に休憩す一老翁ありて柏梵字を書す家内安寧符
と称し老媼余に勧めて之を購はしむ余聽かず老媼又酒をつぎて
余に與ふ辞すること数杯を飲く味ひ尚に存外なりしを
思て止むを得ず其符を買ひ金百文を渡り柏杓を以て梁
を注ぎ之を飲く是より石磴漸く嶮しく油こぼしなど云へる
りの老媼は餞りに是迄へ唐休憩して時の経

路を分りつゝ石壇を誤ることなかれと云へども人先づ此に迷ふ
に付上平坦の地に達す即ち小社の在ところにして銅華表門社
は甚だ壮麗なれども殆んど程のしのびては傾き古社なり
東照宮小祠なる隨故にやや慈て出張れり日光にて採み
し上なれば又拝すること能はず要方には蜂子皇子の陵
皇子の歌に
宮木もれるが羽黒の山鴉かしらの白らんまでに
と云へり皇子は此の国授者にて其御遺骨石なりと云へり又石
制櫻を以て慈に迷路あり此を見に大なる老木の陰に
一株の老櫻枝を交へり其上に小祠盛岡藩主の心願

往復僅に二時間を費せしのみ宮舎質朴風俗しよく一日暑を避暑を覚えず真の避暑地といふべし此社社司某来り同伴数刻を暑酒しさかなすべて沈酔し杯枸を知らぬまで飲まれぬ

何者か知らねども金更蹌踉すきにのらねど朝起出て

宮内者をまつ先達と称する是れ稍々にして来り共に歩む此の先達

人の善き男女へと頼母し彼は余の外に三人の者を宰内し其者已に先

に行きたれば急行して漸く追ひつきぬ、これ志は裏道といふ表道

は四里遠より此に来る為なり凡里にして野口といふ所に出る此地

より三里の間平坦にして畳の如し所々に茂れり此に娘達の歌舞待

ち受けて銭を乞ふ中に大きなる中に彼の同行者は

あるあり曰く今夜の御行きむ銭持たず又撒かれ

ず御に御らこうたも

思ひ〳〵すべイヤ撒し

ゆれ御行えんと

忠実なる其都度に与へらるる或は娘達に向ひて歌を唱へよしからば与へ

ばなどと云へば大聲張り上げて土歌を歌ふ中に婦人に向ひ紅白に朝

まで行ひ何人も婦人に向ひ手を上げるなきべし此等生まれて金国故に銭を

乞ふは世の常にして一種習慣風俗といはん余は銭にて十数程

用意せしが中にて与へず廉里園を隔てしことなり又曰はく酒

を老媼の杖手かりて銭を乞ふ中に等は恐を情れなるとも

可ればと与へつ最も憎むべきは道番付と称し少し許銭にて土

かりたしを乞ひ乞ふ者なるべし大書なる名前を付け銭を乞ふ道

すがら憎らしけれ一の鳥居より以上は此事の跡を絶ちたり此

朝朝より暑り凌ぎ肌を脱ぎ寒き程にして汗ばむ程なるは夫

みよからしが此時分より細雨降来り或い疾風樹林を動かし凶兆
なる天象を呈す而して北候のやや思はれ心地ならず行りしが上り坂
ひ雨のみにて風はやみぬ路は峠を廻り下方に達し溪聲聞けり
彼の同行者等は皆稍和来れるが其の中に人鱶の如き
顔を出し知かれ聲する立籠の男此上来る路にて新調のごぎを置
き忘れたるを休み出でて先のを交替すべく沼津にて古ごぎを
得間合せ帽子を海中に投げ捨てんと心又
此と実見せしはまざよけれど三宗軍何者か奪れる華財布
を遺失せり注意にて先達が出発する中一人の夫婦男女し先き
の方にて何やらむ指し指示にて異様に躊躇猶の態にて

多くは大事にて注意せしに皆何も遺失なしと叫び打ちすぎ
車にて衣物取り寄せて包を開きたるに其失ひたるを発見せし
機已に晩し彼等は大に指ひし奴を詰りたれども畢竟彼等は
同抜けなればなり彼は先達に帰後今未だ若し有りたる時は已れの
所得せよと心入り先達は正直なる男にてから久折返しまもなくと
云ひ登り道なれども隙悪と云ふ程なら正午頃まで
に宿車り一小屋を総ひ竹子汁を喰ひて飢を癒す飯は一椀八
銭にて最安なる素麺一杯二銭三厘なり山中別に変なる水にて渇
を醫するに至る
さてこれより浦隆山を登る余等が四名と外に十数

名ゆたかなる荷物ここに留め身軽いかちて好くて大許にて大
雨みる案内者は歸て雨具を加へて来たるに本庄の男らは
彼が此言を女子は畢竟此行を阻むものと察し或は邪推かし知ず
可かずして猶進す此際險絶岩角を躡み蒙雨を冒さて下る
或は樹につかまりて巧に珠玉雲霧をひちり衣袂を濕ほし或
は手足をすべり顛轉して下る此のあたりは劍の峰と稱して山中の
絶巓なり補陀洛山は數丈の巉岩五心ありて九十九所
化して岩上に小祠を安す參詣者は草鞋を脱し跣足にて之
を攀ぢ一二回禮し神詞を唱ふ脚くりなどいと大きく
と二十町にしてめぐり澤に達す路常に溪流を渡り河床を

踏む最初は別に見るべき処なく唯心の小
屋ありて石垣を寒水石を貫る此より上ること一里半にして元の所
に達するなり尤も是は捷路にして上り坂の險しき言語道斷な
れど猶厭ふべしなれど其の景色實に心して戰慄する程雪白の路
化して積雪數丈溪を滿ちこまりて堅なり其勾配の急なる
甚下溪勢の凶惡なる呈伐衣と草鞋の間に雪入りてすべるなど
心を痛ましめて行きすがら上り坂なれば大半坦にして御
田が原を以て此に出つ澤過には水さへ水草自然に生じて青
田挿秧を終りてかがやし是れ所謂御田なり田休所にて飯
しるこを食し腹こしらへ勇を鼓して出づ此より三里の間路迂曲盤

旋して登り岩石横はり能く雑木など丈低きが偃蹇して峡
も明らかなれば晴雨未だ定まらず一望濛々然此の景なしこれ
有り山の頂を達すかの十字軍の士が数月長征の後漸く聖
地近き遠一高丘に登り下方の楼歓山歓然たるを望み彼地
皆地の接物せしとぶこと登り者に又此感ず況や雨形
風姿艱苦せしオのうかがはるは又しほなり
月山は此国第一の巨鎮にして海面より高きこと六千五百尺形状
聖山に似たるを以て一名神山とも呼ぶ天晴れ清朗の日には遠物
の眼界を遮らず駿望千里風色悠々快豁と云ふ七歌
月山くもらぬ影は冴えふるさを里に住をして加賀

なるかの月の山遠に住をして 月のなき影を見るかな 大進
社務は月山神社を以て官幣中社にして月徳余を奉る
時は石を以て四面を畳み危登立面し 社殿は神鏡
品形者にては此山頂に宿する（とりなせが時尚早かりし故一里半
ばかりの雪氷の小屋に投ず四面残雪猶ほ白し此に宿せしもの数
十人衣を借りて寒を防ぐ相半ば寒さ如ず夢寐安からず展転
及側す晩餐は面倒なれども朝食は一椀と限り定めは十時の
ことなればなり
月山百朝五時発 細雨降るほど霧こりて月山を下りて湯殿山

月山より湯殿山へ
此山修験の個処(所謂かけ所)三所
鎖を伝ひ岩を攀ぢ三辛ふして
郡に鍛冶ヒかり昔し
月山九合目より鍛錬し
所と云ふ又行に大かさけ
り術て陸の丸数崖十八
但に礼石を撃ち水所
すみ丸髮森と堂の院をし
大かさけれん水かさけ
海と岩水嶮岳の
絶壁に激し角に相かけ
数を数へて十三回
路散して華ち今して散し
湯ひ〻し水相
まる所湯殿を下り
但に深に是より崖路
湯の鐵鍋鍛冶を伝へ連絡
此山を戀ひしたひて
心を此峰の個処(所謂かけ所)三所
鎖を伝ひ岩を攀ぢ三辛ふして
湯殿は月
山の西南に二里半に
り術て陸の丸数崖十八
但に礼石を撃ち水所
すみ丸髮森と堂の院をし
大かさけれん水かさけ
海と岩水嶮岳の
絶壁に激し角に相かけ
数を数へて十三回
路散して華ち今して散し
湯ひ〻し水相
まる所湯殿を下り
但に深に是より崖路
湯の鐵鍋鍛冶を伝へ連絡
此山を戀ひしたひて

に入り武公かつ武公頃新教撰
と聞にして廣前に達す

綾雨綾雨奇久尊之
湯殿乃御山乃神乃御
前平拜美奉留

戀の山しげき小道の露はらいそむるより
百二十回の鐵鎖を設く下には石泉鞋鞋をして
山を上りて又下る難嶮の側面に長さ十三回の鐵梯を
神祇伯顯仲

中に滿溪谷千仞何所のかけ所
行こと里餘にして仙人澤の
間に出る時に七丹天色嘆く時れ
神酒に微醺を得又登る此道は
法り安かしが前以て徒合はぬ
して山を行街道を出し
立し風致や見さし又嶺を
に入り武公かつ武公頃新教撰
と聞にして廣前に達す

戀の山しげき小道の露はらいそむるより
百二十回の鐵鎖を設く下には石泉鞋鞋をして
山を上りて又下る難嶮の側面に長さ十三回の鐵梯を
神祇伯顯仲

中に滿溪谷千仞何所のかけ所
行こと里餘にして仙人澤の
間に出る時に七丹天色嘆く時れ
神酒に微醺を得又登る此道は
法り安かしが前以て徒合はぬ
して山を行街道を出し
立し風致や見さし又嶺を

ここに休憩し先達を酒飲み酌みかはし終夜列坐三山の行歩を終る
三山登路往古より七所と定め則ち羽黒山、岩根澤、本道寺、
本井澤、注連寺、滝折、右坊是なり
附り、月山奇談（先達の話し）
越後国某郡某村に某と云ひし男山に帰りしに甚長子偶ま登山の
機を得て大和成就と云ひ男山に帰りしに甚長子偶ま登山の
日を以て妖死せり、彼小男思へらく神に寄して此殃を受く奈何とも
すること能はずして快く楽しむ人行国果の理を説き其法して心を乱
さざるを以てしければ彼之を頼し次子又登山せしに次子又殺し其
次年も登山せしに第三子又病没し嗣ぐべき子もなくなりぬ彼等

悲傷嘆息隣家に物なく天地も笑し神明も許へ難き施人
訪りなり或人彼を説破し次子登山せしむ已に数回登り
しことなればよく山中のことに熟し案内を連れ然て登りて絶
嶮を分て折しも怪雲四合し烈風沙を捲き天日曜をかくし
晦冥咫尺黒の中に一の大人道出現し手に無限林満ちる三の首級
を携へ後ことして歩み来りぬ彼の客怪しいぶかりはむかひ已きて
地へずたに対して神語を唱へるの外あらず大道は徐に彼を
招きて曰く汝生来三山を信奉し其徳最も篤し惟ず
汝が三子は汝必ず将来必ず刑罰を蒙れ良死を得ず汝
の所業をかること非常なり故に吾方便を以て汝が三子の命を

尊ひて此が信仰の厚きに報ひ、貧困者を憂へ他
人の子女やしなひ家を弱かしめざる家門の繁昌者日に停べしを
彼此をき、信心腰に銘し老手の迷霧一朝に晴れ神恩の廣大
なるに感じ昭仮其言のごとく彼世話し毎年登詣し生涯中
冥加の登山を欠し数年前に病没しられと常に一法欄に過
きざれども二方に於ては迷信の夜の妙何ぞやを見て益々
但し補陀洛山の峰は迷信者の勇気非常ならざれば行き得ず
所なり すべて山に登る者は齋戒精進し邪念を挟むを禁じ
身に白衣の装服を付け神徳を唱へ金剛杖を立て登るべき
も同行者と異ることなし

けに細雨降り来て晴る異なり 彼等三名は尾し千林寺奥
他の分け所なる旨で金峰山に登る 山は一名五老峰と称し一金峰
神社に付き 伯耆国は里有半 木根蟠屈し道路の崎嶇かなる
降雨の後苔蘚悪く湿ひ雲磴石階を滑りやすく歩行なるを
知らず漸くにして本社に達す 西此二三町にして巌窟に奥宮と
称す 山上の石碑金色を帯ぶる故を以て金峰の名を付せし
ものなるべし 山上の眺望殊に佳なり 鶴岡市の附近最も
りて西畔の半に付き 山を下り西側に出で田川温泉場に投ず 湯
は清澄なる者根多 夜ばかりこと 万こ 此んども 羽此屋指の浴場
なる旨なり 此夜 彼三人と共に宿りぬ

一日朝發金峰山を左手に眺めつゝ二里にして鶴岡に達す直に孤峰に登らんと欲せしに一日おくれし故彼方に憂慮しきりに折角なれば止めんと悦言はむなしく皆遂に酒田行を終の明のことなし一日滝巡り四時頃より佐藤氏を訪ひ酒を富まして驩す

鶴岡領の西部最上の派の上流なる殊に奇景多く又湯殿温泉大山寺寶寺など一帯の佳境なるべきに前途遼遠にして如何ともなし徒に徘徊し得ざるを遺憾とす昌一同部を招歡するや大醴を迫賞すること六度が代の多務なれば皆思ひ止まるべきなれども為に佐藤角田の両生に送れざるはわきて惜しきことなりき

十、鳥海の樹麓

一日孤峰を決れ酒田を目ざし途に地震の為に倒壊し跡四里七里鶴渡川原を達し佐藤金吾を同伴して行けど其宅見当たらず乃市中を散歩す明治二十七年十月地大地震の家倉の顛倒する所数百戸同所より出火し市街の六分の五を焼尽に帰せしめ残る者は大方全からず其惨事言葉に尽し難し市中の人家大抵仮小屋にて新發田を除く異なること無し日和山公園より望む市の西南より一帯の広野にして南は最上川の枕み北は遠く鳥海山に對し風景や明媚なり兵は青楼紅閨差にて棟並び檣を

文の山の芝生の上に午睡し雨の聲あるかなきかにして急に起き
山をくだりて一旅店に投ず秋陰石際に沒む方なし
月九日夜雨来り翌朝宿を出で再び佐藤を訪ふ折しく其家
に行き迎へられ食を終すや彼を伴ひて須田貞誠を訪ふ
士龍は詩人なりと知らるるも性質極めて自ら強固なる
ものにして詩を以て生涯を送るも詩才は拙なり彼は詩学に深く詩才に拙なる
事甚だ[illegible]根[illegible]なるに反し三度前後疲軀跛脚にして色白くして細き男子年
は二十七八と見へし互に詩を談じ同行数刻を盡す金沢生
詩を賦して彼に贈り其和を求む彼又旅行の疲れ甚し陝中
先輩を必ず歴せしことなるよしこれを信じ情期し一見長途の
思ひ彼遂に鳥海山樹蔭の詩を作り賛せんとし此日余
大に其説を感じ午時繰り出で茂泉を訪ひ酒を酌む
れより佐藤の宅にかへり茂泉を訪ひ酒を酌む
を同じ興を乎ぶ相又詩を討ひ数刻にして分る曰く明朝詩
を作り賛を以て其用意を示して眠りに就く
月十日七龍遠来る朝食後或る行き等曰く昨宵来
客に三更の眠りにつき蚤疾俄に起り今猶生憂
を既にして断然意を決し袂を揮て起ち興を催す先ち
又佐藤氏とかへり結束し婦して出で同道を伴ひ先づ十二瀑
の方へ

此日新晴暑威殊に甚しき故二里の長道一回し休憩せずして
皆急行し山隈をめぐりて渓に達し宿営樓に投し行李を
卸して行き見る渓は寸時水枯れて半分るも及ばず然れども雄
峙趣自ら起れと云ふべし峡勢殊に佳及感過一水流れ来り岩窟を穿き磴間を下る曲折委蛇十二段となる紫
其名の起る所なり白雲緑樹を掛ひ青紅松下に花ぶ峯
奇麗全て造化飽を知らしむ前高山鳥伎を献じ
静閑此窟自ら一小仙境の趣あり余詩を賦して二首を得
り乃ち長歌を作て和を求む樓を帰りて其詩数刻敷成して
成り余に示す

密樹遮天日燈燈在路傾脚底雷霆響耳根爽籟鳴人間未
到境猿鶴得其情暫倚巖松下白雲晨晨生
山樓伸欠脚一笑西心傾松籟笙簧奏幽禽石磬鳴頭是詩無
俗韻対勝農閑情今宿龍夜窟寂前峰半月生
此夜蚊帳を釣す生憎に相半に至り蚊雷大に鼓ひ来り夢
結ぶ能はず起て檻を倚れば猪月林間より漏れ爽涼水の如し
翌日亦此窟渓を訪ふ渓が却て同道を同ひて行に遂に渓退
却する面白からぬ正路を辿りて古戦場を思ひ出す渓
戸村と共に行き岡野玉渓なる者を訪ひ余も招かれす玉渓は
醤を業とし好て詩を賦し富麗艶麗其果都を在しは

や、盛名ありしまゝ亦た紙を示し閲読数刻にして辞して去る
大龍は遠病やまず其所用ゐるをもつてここに独り分て酒田より
かへる二三の紀行を書き余に送る尊意謝するに堪へず過
年東道の賢主人行脚其豫定の如ならざりしを恨むるの
この日天日焼かがやき大に疲困せしがはや夕景をなんばを経て
ゆく外田まちは宿とす小宿多くして日暮れぬはぎ
にて此間路は常に溪流に沿ひ平坦ならずまたゝそれ列に高
白き景色もなし凡そ此澤を見る者先達の家にて其事内
を得て行き歓ずを常とすれども今は此書を知らざる故村を過ぎ
過ぎ地震の為め半は傾きくづれ山中よりかけ入ること三四

町にして澤に出ることに初めて垣をめぐらし門を鎖す澤は頗る
ひろくして他に路なきをもつて垣を乗り越へ澤に出でゝ沿歩す澤の高
さ平丈にして少しくつきたるる岩の上より流る故に立を凝衝す
るにあらざれば能はず一濶すると雖も其下には天岩の平になるもあり
て澤潭と称ずべし澤全体は美人のうすものを懸けるがごと
其やさしげなる姿は自然に抱かるゝ為に思ひ時に逗留一線紅
を注ぎ澤下彩虹の回環するを見る其数幾十條と云を知らず殊に
面白く美し漸く黄昏ときなれば又村まで先達の家に投じ
大龍の添書を示す主人父子迎接し待遇頗る親切郷里なり
其添書の文は久保先生は目下東京有名の詩人なるが今般

旅行の途次澤主人指する為の貴宅へ御一泊なれば小生幸し
可有之詩若は揮毫御依頼可然之旨有隨分吟き立
てたしのなり覚て唖然大笑冠纓峰(尾)一絶へ吟ずるを
序之記するは古龍玉溪と共に松村琴仙社中の者にて
詩は精錬工整を以て世とし吟と氣魄の潤大の冬の失葉能
はず詩才みなは玉溪、古龍の如きまさること数籌かる男居に有
る珍らしき名物とや以は此左に両家の詩数首を録す

送人之北海道　古龍 文

乘槎北海渺茫間　六月寒濤碎雪山　邊塞榛荊多寃
骨　知君憑弔淚潸潸

繪島　玉溪 悅

仙槎棹到水之涯　日入平沙鴉影垂　古洞噴雲龍現怪
三山採藥客誇奇　潮來白浪捲千里　月出寒光涵半規
何處寶壇香馥郁　疑天女雨花時

題岐女姫草源詩圖

佛前呈句之意珠圓　色界常憐夢似煙　水月鏡花描幻相
一枝彫管美人禪

玉溪の為に作せる者なり初めは毎日詩歌に作成
の其雅趣の懸賞を獲じ乙等を得たるの作なり其折本
添圍と仕是彼の別號なり

月土百早曉夫自ら宴内して又澤を尋ね朝昌色も見所の
り歸後人手に詩を書せむことを求む已むを得ず大紙二幅に歡
澤の二絶即坐に作りて揮毫す書し了りて懸けて見しば客な
徳の技芸は論なく客も大に行のまかりて我ながら見るに堪ず
夫大きもむび他日来りあはむ折もがには掛物に仕立て壁に
懸け置くべしなど言に言ひ合ひ客本数回先改しけれ
ども今収困版の折ふしは年賀しごまへしのきく丈けに書き得ず孫
さしくしと今更しみ〳〵と瞻て徹せて熟定せまを今せし蓋
如字筆鞋辮書をとりて年まかり陸の岐ところまで数所
送り来りしは感謝の外なし まづ山岡の民は朴訥忠実今に此如し

こゝより筆津黒川(上下)などいふ小村落を経て岸を越へ川を
渡り杉澤に入る別書面坊と名づく鳥海山を指者服部札
尚き家に到り行李を針し明日鳥海山を登るべが今日は二ノ
澤を見物せん故宴内前周旋せよと命せしに宿の妻幼き娘三人
し自ら出て客を迎ひ寄せ見れば皆美人なり皆美人なりとかの男
たちはなしに折り其家の産男美人なりとかの車り自ら進む
宴内すこし二里許にして鳥海山樵夫に行り路は大いに荒野に
して細道数條ありまるかの宴内者し一回路を迷りし迷ひ
皆心ひつきを地へ離さに追こと殆んば木立ひり森として生ひ茂り
光光平あり脚下に流ひごと野鶯し蟬相和して鳥こ

り路二三の清水有り渇を醫するに足る嶮峭なり鐵鎖を攀ぢ一の瀑を望む是半腹より発せり餘りの面白からぬがもとより

を捲て者を行く又崖を上り数町にして又鐵鎖をくぐりて下り二の瀑の下を出づ瀑は高きを以て餘り雄麗の致を極めず蓋

し地震の為め断崖崩れし事なるべし数等の左右往年地震の為め断崖崩れし事なるべし

て瀑の全景を捲ては一し捲する所なく溪流清瑩錦石特立

明なり泡沫飛散して霧を作し陶然として

歸るを忘る西瀑共に山神祠有り又こゝも鳥海の山頂に

達する路なれども地震の為め崩壞して好き得すとぶかて日

暮る杉澤に出る路の右傍石洞有りこゝも神祠有り行きて憩

十、鳥海山

鳥海山は羽後国能海郡の北境に清々高聳して海邊

より直に隆起し海拔一千九百六十尺達し其北は由利郡に接

峻峰天を摩し山頂萬年の雪を戴く国内第一此より望ては

北北東として純平なる金峯城を望み西南に当り望みは岩石容の如く異なる為めに面

白し海浦を隔て一は由利郡矢島より登る路二行り二は

道に行て相去る一里山頂まで九里余と雖ども其実五里

ばかりなり此処に宿せし登山者は夜半に起て食して北に薇

岡より登山者に先達の尾して登る所の光達明

日は微雨なり人の登山寄者多く差し要すれば御具人にて慈
こ先達をやとひも(を)若主の必ずにや困りさんぬも先達人
やとふは存外の浪費とも云へべく米べらば人みて登らむとて物を
つぼ(壺)の好きの云ふきよしき大と安堵し絵図一葉を求め細密に
注し置き実際五里の登りもすれば名を忘れに及ばず具人
とちんば朝早くらうき折に出でんは二細と或は樹蔭にて路傍を
そなつまれば東方日の頃出で立つ拵をなし勧めら
まに酒しさかに飲み愚を記を設葉しやかて一睡す明れば
月十三日朝七時頃食事了り成ぐ身軽に支度し例の
金剛杖ありさて推しのぼる

すでにや原はて富士の裾野高こに一條の大路にて毫も迷ふ
ことなく二里許にて駒止の小屋に休り一憩す、此より一里にして水
石と云ふに出る山中迷ふべきところはここのみにして野水流れ去
株の杉樹あり左は大きな道なれども樵路にして右つまり水を誘
ずして行ぶが正路なり路は低くして上には老樹生ひ繁り柯を交
(葉)を重ねて天色を見ず洞中を行るの思をなす漸こを切り
抜けてやけば林間の路なる此日朝来天色快晴なれ折しも
流雲空を覆ひて雨を挟みて飛ぶとして低迷し悠漠満目疾
風人を撲ち雲氣独中に満ちその重きを感ずるばかりなし但
ろ三て山をすぎ蓬莱山に出るこれより赤誠大澤と云ふる路

つゝしみかけ所なんども総て行き尽す着王子の宿屋休まずして過ぎ南澤、西物見、うづめ岩を経て竹坂にぞ登る此
辺には老樹なく毎其処性つよき灌木の低く地上を蟠りて高
く鉢きたる夕照曙渡く宏闊なり右方遠に高く白絲の瀧
を望むこれすなわち富士を経て河原宿に出る是より先里
人登賽者つるをなしが道よりは此處にて追ひきり河原宿の
つゝきはすべて草木なく雪白く残り小屋の前には一つ渓流行り
其水清らにして玉の如く其冷なること氷の如し執心の信者はこの川に
て垢離を取るを例とすこゝに少休して持飯をかぢり氣力を養ひ
しかの登賽者等を促して共に發す

小田の原と称を二三町行けば大雪にぞ積雪萬丈満へ
ず雪上路なら難ぶ受来なら鞋痕を見付てこれより行くみ
動すれば迷ひ易し雪の道しば〳〵程なく又小雪白くなる此
所地雪上の路合て二里と弾すれども実際のところ一里位はさしかなり
りこゝは富士も見ぬけしきなり仙洞、筋坂、を経て色絲の岩
石を攀ぢて御峰に出ることに華表あり昨日富士胸実行
路と同じこれより下に大口を眺みつゝ障壁の上をすぐ行者が嶽
を以ては弾に嶮立して樵つべからず鐵梯を踏んで隙に登る
七丈三、八方口と云ふをすぐ必ず彼れるほこらあり御幣など
立てこれより先の方は新山をいひ尤も障壁の畫く破壊

前碎くるものにして峭立斬然細のごく地獄の細の如くに似たるべし
しばらくして陸地測量部の抗立てるる所なりいるる是を鳥海の
最高點とす神魂の茫然たる双脚天界に立ち落ちて風雨御
するの想ひ眼を放ちて四望すれば林巒陸の主軸なる秋田
陸羽の境界を劃する大山の大系は遠きして奔馬のごく南西
西しは日本海に沈みして一望天に接し雲耶山耶髣髴として無
の間遠かに鮮霞肅慎を望見し近くは男鹿半島飛島粟生
島佐渡ヶ島など煙波渺茫の中に點綴し雲間最上の大溪谷を
下瞰し越後の山脈更に其間に行き氣象幻轉雲吐し空山
ず百景つきて千景出づる宇宙の神氣は心骨を貫き右に妻

妻我は天上人か仙境かけり忽ちにして疾風雲を吹き日光
薄蝕し海色卯暮なり峰巒暗く模糊にして景物
し高寒骨を刺すにて地面やからず
荒神岳肩寶奥羽などを過ぐ皆新山の部にして岩石磊
磊として横臥し或は樹木を生じ或は洞窟を生ず岩間には幾千
萬人の踏を忘めし痕あり今明治に至りてもなほ遺
社を造す社は第二合目にあり一宇の祠廟四面岩石を以
て壁とし神鏡煌々たること形のごし社の近傍にやはり大石あり
彌三郎石と称す俗説安倍氏の部下將鳥海彌三郎が潜伏せし
所なりと云ふ社前に数基を投して燭をともしめ祝詞を讀

また其途中二種ばかりて珍らしき時ゝ午、きりて飯樋十屋より
いとり飯敷拵をしさめやかてある杉澤の産は米内を頼むへきよし
心ひしに昼て要なのゝしして頼まれ十五ヶ所にして右腸痛を上
リ又雪道よりかり手ふしてゆくに天雨大より到り然ハ暗澹と
して難ゝかゝ上登嶺蜂蜻岩灰砂の長をゆくこと二里にして
島ヶ海御宮神社にいる眼下に島の湖所見出て大にして
湖に非雪消て水を湛へたるものたること疑を容れず元對し
て実起する大峰を鍋山を以傍に稲村が嶽所り同に
拜し餘を元腹にしたこと出づ山中猶一湖所能ゝ池出ふ
庄島ヶ海の南にいるよし雲晴して大霧深くこの湖光見ゆ然ハ

笹嶽を度て凡そ十丈所にして路二つに岐る左は浜通道にして
右は中滝道なり余ら右折す是より峯十丈の巻寒者
塩越まで凡そ七里ばかりなり是非ゝ追ひ付かんと口管
多きしし通ゝ生合はゝ路には岩石磯確にして足を刺し苦
難ゝ湿ひ滑澁歩み島かゝ大ゝ少しこと成冒を知らゝ
漸ゝにして畳野ヶ峯に雨晴して虹鮮に(懸)石を洗ふ仲津
白波のきら〳〵を見ゆ今しは塩越の町なゝ遠し望て左を男
んゝやゝに一日の山ゝるゝ見て見たゝ波れしゝ(氣)みのせりて掠
取ゝ野水を流り塩原ゝ入り暮烟一抹驛樹を抹し西
顧ゝ倉ゝにいる宿小滝の村ゝ

村端に南宋瀑と呼ぶ小瀑あり此
処の産を下る数町にして達す、瀑聲轟轟として百千の雷霆
に似たりかく一瀉して来り[滝の傍の岩屋を指さしてこれを指さしてこれを]
瀑の形状は略ほ二の瀑と同じくかつ峡谷感迫するを以て熱
の患ましき同日の論ならば頗る雄壮荘麗真に絶歎なる
すべし島海山堤諸瀑中の勢甚しくふるし[瀑布小枝を自枝と呼ぶ古昔より殺し秋に]
鬼氣人に迫るを覚へ愛を割いて去る山松村中の坊に宿し
火度しの所持をなし始めて腥葷を食するを得たり宿泊
者の帳簿を点検する折友人中若尖太郎が一文が書
前代未聞の宿泊せるを見たりと
（未来集 出羽なる北の白糸なれし人をつれて 白早しる神はちかひの結ぶすまい かりてそわるなるなるなり）

十二、象潟の跡

十四日朝晴朝食後僅に里有餘の道なれば一時間許にて
塩越に達し古龍の紹せる金右三郎なるものを訪ふ歓待備
はれ正午に切に勧むるに一日滞留して陸に山の疲労を休養すべし
余は其好意を感し且つ古龍の面目を忘れ難しんが為に特に日
を延して楼上の一室を借り羊羹を備へ（雑書数十部を借し
終に偃息せむ午後共に一壺の酒を添ふ最も悦ぶべし在来
りて夫妻官等を来り大に談話を試む皆少しく文学の志留り
聊か吹くに足らず多数の面白を出して人生が書を求む何の心
用なし僅に書きつくす酌んで三更に到り宴終りて皆眠りに就く

金氏は此国屈指の豪家にして帆船十数隻を有し毎年樓
浦港に航して貿易をなし彼方にも支店を設くと云ふ
月十音、輝して出づ主人の家偶々宴なりしも多忙の
為め折角迎へ送り途中人馬を同じ行きて見るべき地は塩釜の北数
町に在り七ツ森と称し高く天下有数の名所なり相傳往
昔此村の富なる者あり遠く去て奥州松島に入に嫁す偶
〻中秋月明の夜に値ひ其美を偲びしに忘れ難き
まの嶋や雄島の月もなにならずたぐひきかの秋の夕べ
と詠ぜしと其美しさを想ふべし絶美風光松島にま
さるとも決して劣らざるを知る

本震ひ胡底隆起し水陸島を繞りしを夫相謀りて松を伐り
島を開して田圃となせり洵に惜むべきの至りなり当時一方金を
拠る所風景回復すを得べからざるを云ふ唯昔の面影の彷
彿の間に存するのみ四記に曰はく塩竈の東西三町南北
三十町曹洞宗満寺をめぐりて九十九島八十八渕有り南の市を荒谷
と云ふ市中に石有り冠石と名づく市南の海中に数丈の巨岩有り
冠巖と称す市東の水汀に石壁有り青家と称す此巖を挫ば
二刹有り南を長仙寺北を千手院と称す其海上に浮るを如
見嶋二隻島稲荷島岡道島新島不島等千手院を過
ぎれば一橋有り橋北に伊勢熊野の祠有り其西を神宮崎と云ふ

虹橋の東には柿島夷島（通嶋）度島鄭躅島鳩島板取島より虹橋を渉り市街を抜て此行すれば、情河の社巖を中島と称す是より長堤を行くに左に妻神の祠あり祠下に屈曲する細逕を進ず前に島島あり是より坂を上り板橋を渡れば妙満寺なり寺の南坂を下れば長高島あり其東に何ゝを福島と云ふ寺門より小逕をすゝめば短橋あり小祠を建て神殿神社と称す古へ妙満明神と称す又寺門より西へかゝり屈折せる水汀を經て路行く大森村を横る此処の濱を鮮魚灣と云ふ山半を洗ひ白沙を踏みて進めば島鼻島濱あり此石数丈青螺洗ふがごとく愛すべし島の南は松崎なり鮮魚灣東には延森、篠島、虎山、大潮島、霜楢島、南平、北平等の諸島星布せり又妙満寺より西へ神殿あり此には楢島、壇焼島、長島、大鹿島、掩島、蕭島、蓋盛島、白鷗島あり相並りて西行程なり東に楢花、清龍、虎島、鸕鷀島、水島、島絲毛島、畫松島、霜白山、夫妻島、豹紋島、蜆島、巫山島、宰相、清等清波の上に散在せり宰相清の峠東の山上に蓋府の廟あり古松鬱然たり左の林中に雙湖あり南を雌湖北を雄湖と云ふ豈に水汀なのみならんや梅森、蕪島、松島、繪島、薫洲島あり以上記するところ其大略にして今や皆荒廃して甚だ亦失はんとす古へより此地の題詠者、参数百を抄録

象潟をなつかしく経て笑がれて帰る渡る神官明神つ　西明寺

松島雄島過ぎて、きてみる哀なる象潟の浦　親鸞上人

及松造世の栄やうとし経けり象潟の海士の造屋を我宿として　能因

夫木　天つます豊受姫にことはむ幾世となりぬ象潟の浦　仝

塩山百首　象潟や海士のとまやのしほくさ恨ることの絶ずかな　通方

新古今　さすらへ我ぬれぬれば象潟や海士のとまやのつまとなれぬ　顕方

象潟にかたどる和歌　象潟や海士のとまやのつまとなれぬ　顕方

蜑満寺とくるべ　東廻りして島こそ風景も奇なりさ

俳句芭蕉　奥の細道の折山を来れば雨を西施がねぶの

花をあめとし数句の詠て塩越の某旅亭筆の短冊を蔵

よりほかにしく薩摩坊津櫻

島なれば島男ふに桜島　丈とぶ

坊の津まをかりけ比ばは

けなるるるとてなるるる

不審なる三文に薩州坊津は

能因西行を初め遠き宗祇芭

蕉なども行きしにて見

（他の人の知る風景故略す）

蜑満寺は延喜年中僧慈覚の創立なり妙法千珠満珠の

名に象り千満珠寺と称し正嘉年間嘉年時頼未詳と田園を寄

附し其後物換り星移り久しく荒廃に及ぶを文録年中再

興するを得たり今の寺殿はやゝ物ありにたれど蒲灑俗塵

を忘れて寺境中に老樹の西行櫻と云ふ法師が

象潟の波にうつして花の上こぐ一のすの一つ舟

沿革の即ち是なり又神功皇后御掛の松は里傳に皇后

征韓の時風波の為め此地に漂着し給ひ御祈願をかけ給ひ

故に寺を皇后山と称し又皇后殿と唱へ聚落を定め播造の

伝説なり其他蜑鑑上人腰掛石・鐘丸・姿見井戸・菩提

才同種梅・杖手植の松・芭蕉・俳句の碑

等なり寺門の前に立て見れば八方全所の青田四年浪沙に

稲花香を散じ島々の面影を残す小山に打ち寄せる

ひろみ南方には島海山上一林の纖雲おく宛として雲霄を摩
す為り之れに接して路概ね海濱に沿ひ之れを辿れば涼風左右に到りて
暑熱を覺ゆ八里にして本荘に達し道を転じて四道を取
りや、擔せしが五里にして松ヶ崎と云ふ海邊の中驛に出で投宿
翌十日早曉出發し到日を事とせず出発急きて十時頃雄
物川を渡り舟を渡り秋田に入り父執菊池氏の邸を訪ひ其宅
に憩ふ待遇懇篤喜ぶべし同氏曰く数日前貴校の生徒
幾人か此廳を訪ひ紀錄を採獵すること二日にして去れりと
其名を聞かざりしを惜む思ふに我が畏敬する友人、史學家
田澤義貞其人ならん

十三、太平山

黄昏漫歩して城址に上る市の東北に行り一名を高根城と云ふ廢
藩の頃火災に遭ひ遂に荒廢に歸せしを今は衆庶皆楽の
園を為す懷古に臨み樹木蔚然として生ひ茂り翠色滴
るが如く東及び南には鳥海山太平山等の諸峰巒を望み西皆
本海を俯瞰し波光帆影相映帶し一堆の岩峯其間に隱
現するを牡鹿半島等眺望し佳臨望すること多時想
(らく已に鳥海山頂に衣を振ひ雄鹿の勝を示す近日揮毫の事に
事を序ぶ太平山に登り見むとて意を決し歸途勝景を
とゝのへて眺りに秋く

一月十日朝殿菊池氏其郡家に少年を慫慂し金剛に響
導せむ山樹蔭まで三里金峰寺二つ其間陰陽寺坦に
して此の路を覓て鳥居の所ことごとく登り終て三所にして渥美
登三蹟者は此に登るを上常とす少年は繼らし来りて林檎数
顆を取て喜ぶ美なること云へからず又清泉を掬して渇を
潤し又行く路は緑樹蔭の蒼々中に崎嶇極まりなし石神地よ
鎖を攀ぢて登る滑字登ること里にして前嶽に達す一に神仙岳を
稱す大平山の一峰なり峰頂に神祠と小屋二つ有り若し登蹟者の
宿泊を充てるものなり一時を放つて遠望すれば四望寥闊前に無
邊の海を望む雄鹿島を雲濤青靄の間に揖し風光恰も畫
の如く治く抱登るの想ひ有り山頂までは猶ほ三里許
もあるなり時の三寅なるを以て歇山小屋に投して休憩すること多時
抑も大平山神社は大貴大名の二神を祭り祀りて今日社
司村田傳之丞白鳳二年修行角の行者創て修り延暦二十年坂上
田村麻呂之を中興す此山高名を三尾嶽と云ひし佐竹義
宣當て大平村添正寺に於て四事を揮り新らに大平山と稱す
神徳弗如じ遠近の崇信大方ならず維新の時亀田
等諸藩の賊兵秋田城を襲んとし長駆して来り雄物の南岸
に達す時に城中見兵少く且つ糧食乏しきを以て策且
夕逼り殆ん孤城陥るの姿となりぬ藩侯佐竹氏更に敢ず

急使を飛ばし山に上りて祈る敵却りて去る時に霊
鷲一羽社殿中より飛び出で羽ばたき高く舞ひ去りぬ然して使
臣神仙のつるべを見る際期し帰り復命す望月亀田軍河内
山を出て馬を河上に立ち城の方を望むに陰雲濛々として晝くらく
對岸には林樹鬱然として森森として聳り旌旗列立するかと
思へば金鼓の聲遠く聞こえんばかり左右に後に折れて秋風城
には官軍の援兵来りて遂に敵を破ることを得たりとやいと荒唐無
稽の説と雖も敵軍の河を渡りて攻めたりしは事実にして昔ひとり
の老人佐倉神霊の異聞を伝へし今日に至りて尊信猶怠ることなし
實路遠して五十余三里にして五ヶ年三月赤沼にして神仙

岳木曾寺山剣ヶ岳等を還等の難所を経て頃上の木曾谷
神仙の名多かりきに小屋にけりて華厳一瞬の夢を合りり
昔日男を探索するの山を下りやがて城に入りて回顧すれば夕陽
西に傾く太平の山霞に匂ふ
十日午後百姓業日曜に当るを以て主人家に行き共に伏或は
讀書し以て閑を消す年坂鄙家の少年に近づき甚家を訪ひ
て聞ぶ此男は閑節藏を以て寺中去年生なりやと文学的趣味
多解せるを以て知らに定め閑話数刻にして辞して帰る夜散歩
市中の花火は先づ鉄砲を放つこと数発物貨輻湊港
は去崎といひて西北一里半に行市中飲料水に乏しく多くは地

の流を酌む猶遠く新潟にて信濃川を渡むかせし海は近けれども北海の常にてしけの時偶ゝ魚果し甚だ美となすに足らぬかし市毎年大尖り所家なとては奉幣数千を送り草鞋なとゝ共に毎枕元に置き豫め警戒す市中には八幡祠、猫神社、拝殿寺院等みな播磨佐々氏と縁由ありしもの又時頼が衰化をとゞめ唐絹姫の建てし光明寺は市の北里にあり藤房の遺蹟として甚名知られし亀像山浦院寺院その所有なし自然自筆の碧岩集、袈裟等を蔵するのみ此寺は態ゝ行きて見ずすんて神社仏閣其他古蹟名所なとは殆んど特に東北陸奥の地に比較的遺跡の確然たるものなきなり

十四、雄鹿島（附八郎潟）

世人異羽の宋を説く者口を開けば必ず第一に松島を推す然れども松島の景妍美細緻にして美人の靚粧せるかゝ丈夫の気象なきを如し其景古雅にして雄鹿を主とす其景古雅にして跌宕怪奇にして宏壮真に天下稀有の霊境なり一河嶽の英霊固より世の織兒輩の俗書を受けざること猶ほ賢人君子が俗人の為に侵されざるが如く其品位を失はざる同じ住ゝ其品位を失はざる風色の奇なるを推すべし頼醇詩ありて曰く

鴨村村下借仙橈　青石奇青出海潮
洋風空闊大濤驕　窟岡殺鬱黒無底　石老龍身天有橋

男子一投雄鹿島松洲姫覓妖嬈

是其所村より舟中にて景を寫す筒を雄心島
に渡は當時得うり余一人身実に境に臨み命其譬ふべきを知らず
抑雄鹿の地たる東西里南北里南北の三面は海に濱し
東は八龍湖に面し西濃農船越二村の間は一帯の水を以て地
脈を断ち惟ふ東北に一條の沙路ありて頸を連ね以て連坂に通ず
島を繞す中央には寒風山の大山岩ありて海岸の岩石は皆其
破碎し散せしものにして多くは東は八龍湖岸のみ稍や同け除る
禾穀に適す其の出先は高嶺天皇の時を始めとすれども本
山赤神社は景行天皇の時に創立せしと云傳ふ蓋し勝景世

上に卓絶して顯著なる風藻の士の雅詩を振ふもの
ありか曾朝秋田を發し土崎大久保を経て中野にて國道と別れ榎
の坂とかにかり三里はかりして松岡の沙隈を過ぎ濃農村に抵る
ここに橋あり八龍橋と云ふ長さ三百間橋上より望めば湖光一望遠山
眉の如く影を離し蘆葉り舟の點在するを見る唯夏時なるを
て水や少く泥色を呈するは慨とすべし船越勝比詩をすぎて船
ふるを投宿す勝本の北半里にして富永と云所あり巨石並び長
へ岡屋を立て之を大鰐武澤と云ひ里人相傳古漢の大鰐武が
匈奴単于の為に捉まれて羊を牧せし処と云ひ又大鰐武坂を崖
基常に住居せし地なりと云ひ一名鳥ヶ山と云ふ岡を信ずべしなり

才又ほの光ばかりにて見えたるのみ行き見ぎりす
船山は大灣を出し東南に島海山を望み北は平山及び真山を負ひ
北は寒風山を負ひ鶏の岬を復て天然の良港をなす村には旅店
天なるもの四五軒ありきて投宿後俄然腹痛甚しくして也び嘔吐
して食はず寐冊など服用して直ちに就眠せしが輾轉して苦痛沈
み一夜明ること十數回なりしが
月二十日、昨夜は病苦の為めまどろみたるは僅に三時間なれば神
氣衰弱して疲労の如く朝食の膳に向ひしも箸ふじて一椀をしこめ
しのみ病勢依然として苦しきを限りなれど好奇探勝の意は猛然
として つなぎとどむべくもなく軽装して出る根の崎を横ぎり西い
村を経て西村に抜る西村より益々進行すれば鶏先崎に出づ此間凡そ
二十町餘之は海上四五町許の浅瀬にして無數の怪岩奇石錯綜実に
横顛し潮陣衝きて波濤激し殊に沫合し類雪の如く洶々奇観
なりとす鶏の崎より臺島村を望むに雄島雌島臺島能登崎
身投石等奇勝多し之を見て行きて椿村に出る村の中央に能登
山を称する一小丘あり山上には椿樹多く花時爛然として錦の如し臥
ち村を長くる紙次より山上には望見觀音の臺あり此より椿灣の
奇景を一望す其灣東に張出す岩山は全く奇にして瑞巨如し
水上を出でる者は三崎島より椿村より西に進ぶ又西村に達す
村に東南に安部氏の舊址と称する館山山臺あり御前原と

稚子ヶ崎より佐渡ヶ嶽を望し或は館山崎をいひ十餘丈の断崖新
立して一見魂を悸しむこと与り双六灣を下瞰す殊に奇岩多し
巨岩の口を開らいに似るを鯨淵と称し天女の祠ありと称す雛天島
を以て道の左右に横たわり陸と繋を導するを潜り岩と名づく又海
濱を沿て西に行ば小濱村に出る村東路傍に岩窟有り白衣
大士を安置す海濱には甚だ巨石長塚森帆掛島等の勝有り
是より折れ西北に行ば門前村に抵る村より二里にして本山の頂を極
め赤神社の菓師堂に眺望宏闊南は飛島を望み佐渡が
島は煙濤縹緲の間に隠見し西北は直に三蟠蜘蛛を望み
北東は奥羽の群山綿続し景象佳絶の地なるべしきしし病有る

身は嶮陰を登る能はざるを以て打ち止む
途上漁夫に遇ひ特に一舟を準備せしめ乗して飛島に向ひ出を
発す是は南と西の海岸を巡るものにして所謂島は海上及び汀岸
に起伏する岩石を指す云へば不梅の時を以て最期し夏時即此
頃を以て之に次ぐものとす第一に舟をやりしは帆掛島にして高き丈横
三反許り新鮮なる大赭色岩にして海濤鼓々光彩を撼かし
恰も風帆を受け来れば傾きて一復元とする似り帆掛島の西
に当りて小岩を塩瀬岩と云ふ是より五卧牧石点々り島麓
島塩瀬島姐島田島等を経て能像岩より海濤の上に挺
立すること十余丈宛然し能一躍して天に上むとする勢を呈す

甚他小鹿島經島大館繰小館繰御幣島福立島、亀壇、孔雀岩、皇島、烏帽子、夕陽窟、甲島、舞子の奇勝を歴観し阿字島に至る。岩上平坦にして休憩するに宜しく四方開豁にして海中に林立する数百の島嶼を望み遠く伊豆島海の一峰雲漢を摩するを仰ぐ。游客は此島に舟を寄せ行厨を開き、酒を傾むるに、側に女流あり、こは松実がこの後に記す高崔窟に行く時に伴ひ来りこの婦女をとゝめ此処に待たしむる故なり。

阿字島の左方に大瀑布あり。海岸数峰の上より瀉下す。高さ数丈。

丈。瀑の壮観なるは、此瀑の前を出ずれば高崔窟なり。窟前には峭壁屏立して震風の如く海濤相激して雪の如し。舟を窟中に曳き入ること八町許り。洞口高幅共十三丈。其中は空洞邃深として暗黒咫尺を辨ず。巨石頭上を壓して時に隙ちあり。漸く進めば岩面玲瓏潤黄色を帯び陰風颯として鬼気人を襲ひ心胆為に冷を覚ゆ。半町許にして沙積り廣袤共七八間。左右十二坑あり。右は浅く左は深し。左に入ること二丈許にして進むを得ず。火を點じて進む。別に怪物なし。忽ちして陰風一次燭火消ゆ。人皆呈色して来る。坑中危深にして脚を返し其奥は窟に上るべからず。或は七代の墻坑なりと称すと雖ども、斧痕なく海水浸蝕して此奇工をなすに非らざるを覚ん。

既にして宮を出で益を西すること五丁濱船隠穴小桟橋大桟橋
白糸瀑三社島雞天腰掛島立島蓮花島笠置島置島
[illegible]長島鑰(かぎ)河黒島等を巡覧し加茂村の海岸に達して
舟を棄つ雄麗の奇勝は主として此間にあり是の間の岩石皆数丈の
高きを以て悉く海に臨み拔秀し之に草木を生ず禿兀として
蘚立し其光皆赭赤猙獰雄偉宛に見る所の者なり唐舟
此間を縫ひ往き一たび失礁に当らば粉碎して沈没せんの恐
風大に起りけれども風を揚げて馳するに忽ち遠く其快言ふ
可からず然れども高清澄澈し危險は又一しほあり舟を拔き
肅し身の難境に在るを知らず風光の奇絶なる非ざれば実に

[illegible]なるを得ず舟行凡そ三時間を費せり
加茂村に達せし時恰も午後病を醫先為に故らに午食せず行ひて
一嶮岸を越ること凡そ四五丁飯せしのみにして今朝一椀を傾けし過ぎんば
腹中全く空虚にして一物を容れず気力困憊し神氣衰憊しも
奇景に逢ひ宇宙の秘霊を看て快哉を叫ぶ少倉達し
て歩を上ぐすべて畦野にして樹木大なること五日蘇にして暑熱堪へ
がたく渇を癒せんすれども一滴の水を得ず漸くにして岩石達せし頃
内海を地に放て一番病全く癒へ喜悦堪へず疾走の歩を
下すと塩湾を越る地はたが灣の南岸にあり加茂より海路薬
子者は鐵崎壺奥壺白岩赤嶋目白崎蓬莱島鶏島

雁島巣岩中島黄島黒島鯨島佳緑榎島舟島
鶏島恵比寿島宮島鎧島鶏道岬鯨石宮島を經て此
来る元が浦灣は正面に向し南東此の三方に山巒を繞らし港内
固を形なし風浪を避てらに宜し灣に羅根太島潜り岩黒から
牛島板戸り水島を経て道岬に至るを得べし
二里にして湯本に出る此村に温泉あり大同年中の發見に係り炭
酸泉なり湯神館を以て第一等と見受けるる故投宿せし折
研究充滞し由を以て御施せられ他の二三軒は今日は客なき故
魚を買はずとて新鮮魚はなくやはしと云ひて道を教へられ此
浦と云所に出でて宿ることに決し一路して去る一里許にして北浦に

出しも時猶早きを以て拉致すに管程を貪りて行に日暮
れんとし宿屋を求むれども保沢逆上太方に寒風山を望むかれて
登山駕せんと欲せしも部合悪しく具に熱有り低き故興醒めて
宿望絶えて減の琴川より折して行に星光数點の湖上に流
れ夜色蒼然として稲田十里涼風颯々として鶏木を吹き拍
子頃漸くに宿を求め今日は名勝を探り畫し病慰し全り去り
永ば満悦自らに堪へて酒数杯を傾し独
酌一番陶然として酔眠す夕に此地の安食晩食のまま帆貢
鍋をつんでよの世魚を煮て食はしむ土佐弾して鍋をいふ鰹
なければ玉子なと煮るすべての安食皆然り

有二十日朝発八郎湖の岸より沿ひて行くこと弦人ど二里湖岸概
緩水漫奇景ようしく湖し大山湖に写ぬを以て水清澄なり
以濱名の湖などよりも少く劣れり湖は一名を琴湖といひ又龍
湖と呼ぶ東西三里南北八里周囲二十里湖口西南より岡きて海に
通ず即ち典農船越の間はして八龍橋の在るところなり上古は
山野にして十二村落有り田園山澤有れ仙北川之を経過して能
代海に注ぐ寛永年間二月二十日の起水俄かに湧出し遂に湖を
なすと云ふ湖に二三の奇怪有り春夏の交は白氣空中に生し雄鹿
より出る日林山の遠きまで虹を架し其中に山河樹木の影或は人
馬の行列現はし又は晩景くるの頃又は月夜に見ることあり俗之を狐

鐘と称す蓋し蜃と氣楼の類なるべし又四月中旬の頃流氷
矢の如く湖上に多くの火光を生し煙波を相映し相照らし或は燃へ
或は消へ或は遠く或は近く暁に微して歇む俗に之を亡霊火と称し
訛してもりびと云ふ雷起湖上を行けば竹表に煙を立ること有り揮へ
ば益多く生ずと云ふ湖上第一の絶勝として其名高く東北御巡幸
の際駐駕を駐め風景を賞したまひし鹿渡美倉が鼻は對岸
に臨むを以て往き歩るを得ず遺憾極まりなし行こと二里にして一嶺
有り之を越ゆれば海濱に出づ長汀数十里皆砂礫其間一村
なし海水清澄にして魚を数へべく帆影遥に點在し遥に雄鹿の
山霞に見へ

到日煌こして堪(難)きに熱沙、草鞋と足袋の間より何となく心地悪しくいとくほどりてこひばるまに忽ち計を案じ足袋を脱し素足に草鞋ひつかけ波打ち際を行に快なること立はんかたし(時能代を着し能代川を渡ること凡そ三里半許にて)

森と名まりし拾宿、即ち大間越街道中の驛なり

和雄鹿島を指して幾ばくなくまで五日を豫期しと思ひしより早く三日にてすみくらは快とふの外なし能代より弘前に行に二道あり一は下斗米将真が弘前を狙撃せんとて矢立峠を越えるものにして他は即ち五所川原を経て十三湖を海港とせり

十五、大間越

二十日朝発、岩館を立ち三里余にして椿八森(岩館)の鑛山なり銀銅を産す其定産銅山の所有者七山氏なり大間越街道は概ね荒野にして必ずしも幽寂ならず路傍の泉を掬(ひ)の岩に腰掛れば悽然として心頭一点の塵を洗ひ去る(此泉は木立なきに清泉なり)

ず眺たる海を見る鳥海山と雄鹿島とは白銀盤上に二青螺を並べたるが如く海色一碧鏡の如く毫も漣なく波なく布帆貼して坐するに似たり時に二の漁船帆を張て走るは里因(大)を上りて駛す景象殊に快絶なり森より五里にして大間越村なり地は陸奥の国に属する所にて十

黒崎船神をすぎれば風景や、佳、海上西三の巖礁あり又瀧河
あり高舟を傳ひて探すこと凡そ一隧道をすぎて森山に接り灣を沿
ひて行き雛天島をすぎて風光奇を作すに至る雄鹿を呼
ばば片腕くまも及ばず此間多くは石地にして烈日焼け草鞋を噛
んで艱苦殆ど極る岩館より篠ヶ谷にマンガン場あり盛に
採掘す境に溪水皆黒し二里深浦に抵り投宿す深浦は
陸奥西岸にあり雲猿伸眉実に天然港を為す市街
や繁盛なり流船寄港する者あるべし村に圓覚寺
を置き五陵上に位し樹木亭亭風光や明媚殆ど
比して美なる国中稀なる所なりとす

二十三日深浦を發し廣戸に向ふ途に行き岬あり岩礁長列
して海中に突出し新然雄偉の象あり傍に数の大岩嶼あり
べて遠海波彭湃然たり岸際を以て大に壮快の趣を呈す此
三の海驛を経て風光殆んど海に雛天島あり東には島
居岬あり前方に所と超相者あり又行くこと一里にして大に漁港
あり海に半出する平坦の巖石にして其廣き十畳所位に千疊
敷と称す其間に奇岩石柱にして起伏し自ら家屋の如き状を為す
の内其大なるものを大石頭と称し小なるものを小石頭と称す平坦の盤
石は数條の亀裂を生じ海水之に注渇して白玉を散するに似たり
水氣四方に充ち朝霧を吐き日光を映し晴虹亂拂し七彩

樣に並立し奥山は壁巒峰立岩石嶮峻として將に崩れんとする
の勢風光甚佳の地なり是より東四里半にして鶏ヶ澤に至
る細水原にて託宣推夫と交代す推夫此地の景勝を賞嘆
して指示して鶏ヶ澤に龍躍るの概ありと余に勸めて一游を試
みしむ余が能は推夫と雖ども單に奇を以て許
すみ色歡と共に地境を共にし別に未だ知らざる所に此奇は唯其の偉
遠に存するに驚き寒翁士の顧を受けむ如しと云く詩能文章よ
り全く無也世に稚らかなるは山鬼水靈に對して氣の毒と云ふ
然し惜むべき哉鶏ヶ澤より以北猶海濱を行けば龍飛
岬に至る其間風景の際る賞すべきものあるよし暇日を以て
これを探討するを得て以上の遊慨

鶏ヶ澤は陸奥沿岸港指の名邑にして殊に繁盛なり維新前ま
では大阪藩の管轄に属する船舶は皆此港に碇泊せしが青森港
の開港を見し以來船舶の數を減じ市街寂寞に衰微
顯はすに至りしと云ふ町はずれに車馬を勸めらるゝ者あり
迄五里位金九錢といふ車窓より岩木山を望む神秀淑
靈眉目に通り清爽肺腑を潤す一揖して告げて曰く好し西三里
後を期し謝金を授て室内の場に登り攀臨眺して乾坤の中異
なるを知る情共山靈請ふ我を俟てと黄昏未だ達せざる内
宿す安全法隆寺と協なるかな

二十四間道を辿りて岩木川に沿ふ往来皆寒村僻地に尺
ゆきの子山岩木山の峰は愈近く峰宮整秀尤も歓ぶべし麻
崎に出づる頃驟雨到り故路を停て杯を挙し酒を乗じて飲し飢渇
を癒す折しも天晴れんとして出て遠く酒を乗じて天を仰ぎ
こして炎熱を忘れ岩木山の峰の雲霧を晴れて二時間許り蝉聲の
かまびすきに俄然として目醒め程を急ぎて弘前の市に入る
ゴシ渡りて弘前に友松沢友七郎を訪ふ歓待大なる者
此夜に行きて泊す蓋し明治興亡の変化概ね湯を設けず故
を以て浴せざることを得ず海中にて体を洗ひ一面四方
の山麓坂道四方を望む快言べからず一浴して通体爽に

輕きを覚ゆ帰途大酒を酌み頗然として酔臥す俄然叫聲前
街に起り宿を倚を見る思し儀多と為するに及びて時偶ま孟蘭盆
住所を擲して街上を斗る西佐海多を会ふ時は必ず宣嘩を始め
なり合を為し又石を投じて相闘す年を為に負傷者を
生ずるよしなれば風習なり此相し一夜騒き続けしまきり
ぶ所に暴を為す輕躁して夢固かなぎしも
二十日佐藤静馬氏来訪し共に城址に上る市の中央なる章
に沿ふ木樹蔚然として森厳の気を帯ぶ石墨三層斷瀑
間碑既女儒碑あり 碑も碑も規模猶ほ考へるに足る本

九楼閣の部は旧の儘を保存し此に弘城博物館を設け
器物寶古物名画を蔵置陳列し衆庶の観覧を許す為
見て去る城東に招魂社を維新の際南部藩内函館の諸役
に於て戦死し志士の霊を祀す境内高燥岩木山は富士に
似て生駒皆山雲りし故度々見えず長慈寺報恩寺幡宮津軽
高信の屋敷皆藩主の世家と関係ありし事総宮は往年南
部と宿怨の為に相争ひて建てしもの其外大
国寺の五重塔なども立つましかれど何通行せざる午後より平澤治
と佐藤氏を訪ひ晩酌し夜は平澤氏に宿し翌朝明日登山して巖木
山を登らんと

十六、巖木山

岩木山は平原の上に屹起して高峰にして形状雄壮景趣雄偉
なりと云て津軽富士と称せり相傳へ寶暦十年
一夕成りしと云ふ山は三峰あり左を岩鬼右を鳥海中央を岩木
と云ひ海抜五千尺実元にして雪表を磨し屹然八葉の蓮
華の如し山勢峻拔登路嶮峻なるが故に一度は駿河の富
士に登らんとて ちぼつかなりと云へり登山人登路
おして中途にて下山する者多しとか霊律が枕頭水中にしるせり余
つら〳〵山勢を仰ぐに登路嶮峻短く苦しきは制御して登るべし
数回を重ねる迄過ぎざるべく最南に一山何程の事かあらむ

さて登るに苦かぬ思ひしに違はず朝設の仕事ゝゝ人無住
らに誇張して神聖の度を高めんとするに過ぎざるを悟りき
三十日朝遥遥登り見れば峰は半腹以下を顯はすのみにして雲
霧萬重迴合せり彩前の市を行き過ぎて岩木山を後り仰ぎ
見れば頂少しく霽けれやゝ久して三峰高麗と晴れ紫翠
究めをして我を迎ふるがごとし老の村落を捨てすべて三里許にして百澤
に入る其少し前より右折すれば鳥居高照神社あるべし野社
として武尊地祇津主天兒屋根の三神を祭り背後に羽州津
軽の藩祖信政の靈を祭る境内に松老松杉を里れ柯を連
ね蒼翠書昼猶くらく樓殿差比して棟を並べ甍を交へ

瑞籬の礎に在りて石なる畫家をして水花鳥を描かしめ柱梁皆
金の彫刻を以てし金彩燦然其の壮麗なるか鎌倉鶴岡の
伝まるに足る津軽家に於ては世々修繕を施し今日に至るまで舊
の壮觀を失はず百澤は岩木山麓の小村にしてここに岩木神社
鎮國魂神多都比賣等宇宙能賣等を祭り延暦十九年の創
建なり爾後の国主歴代崇敬して措かず德
川世の時年々米を流して都鄙を捧く明治六年国幣中社列
せられ東奥の鎮護神と定まる社は三間四方にして黒漆の
樓閣ひ承塵其他四方の板壁には双龍鳳凰獅子象等種々
の彫獣花卉の粧飾を施し金碧丹青輝煌燿灼として光

彩人目を瞠ら士宮門、畫垣、神橋、華表、など皆備はり四邊
老杉林立し翠嵐と相映り其構造の壮大なる東北地に其
比を見ず国人挙んで興日光と称へ自慢の一となす必し温美の
言に偽りなきなり 廿日天も霽れ小鯖陽赫頭上に灼暑熱
地なべから氏初の杉林中に入り休憩す此清泉に掬て渇
を醫し雲吐仲憩し 初の西側華表一つ所に陰を求む
ここに華表六十余尺巾五尺の草鞋を掛け代りを帝と仰ぐ新
らしきものを乗ることの惜しまれたそのまゝ登る神し敬を致すかし
数所なれば各所すべてりて一いび上ることなり純粋の上にして
四面皆荒野なれば木の立ちしかく路には岩石ゴロゴロ匂配頗る急

にして殆んど真角をなすかと怪しまる半里許にして 滝本畫堂 に皆地に
埋まれ見る樹齢すり總計里許にして小屋あり 登山者宿泊の用を充
つる者多ふ ここに小憩し又程をつゞく 右の方より曲がり一三所にして大澤と
いふに出る 即ち渓流の駐流する所なれども 秋は涸れなれば水なし 此
邊樹木蒼蒼として晝暗らく 岩石磊磊として 奇伏奇差 こり蓋
し東第一の絶景と称す 十数所にして清泉あり 錫杖清水 と称ふ
山中進の泉にして岩窟の中より涌き出で 清澄冷徹 歯牙寒き
覚ゆ 岩を拂て飲し 摂頗 なかなかり 氣力衰度 此より上は樹木
なく草しろ〳〵 ふし 岩鬼山 を左に見つゝ数所にして 一峠坂 を登
を上れば 一十地 あり 四面の岩壁 絶壁 にして 全形を在せず 故に詳かに

し難しと云へども或は貴大院の遺蹟なるか、又ち二峻坂を上りて
山の最高峰岩木山と造す巖鬼島海の二峰は脚底に行りて
低坪の小山に華表あり一町許にして岩木山神社あり中に銅
像一個を安置し傍に二小屋あり百澤より此処まで一里半叶縛す
時を設て遠望すれば岩木川の全流を下瞰し南は連山蜿
蜒として矢立峠に連て東方四顧鬼城、薬師、三森、赤倉
梯嶽伊田の諸山を越し小岳嶺を越て北面は青森まで
街道線路遠く一望の萬頃の青森灣は洲潮環として北面
し龍飛の岬を指し雲霧の中に蜃楼の奮地を望む鰺ヶ崎は
脚下に行てそれ迄の大同哉の街道過半まで見へ西方は日本
海潮鮮清涛蒼々として際涯なく直に秋鶴の天を泊す眺望
窮達須臾にして雲煙濛々として疾風一陣雷撼し来ひ来るとき
西側には二三の湖沼あり又近傍に温泉多し
又ち山を下る疾風逆吹き飛雲眼に入りて耐へがたき一町程
行きては引きかすこと言葉及べし山頂小屋にて宿泊すべき糧食
なく昼風も出やむいや豫知し難きを以て急を決して起ち嚴しく
身を固め後ろむき坂を下る南面して峻坂を下る流雲疾走し
処々晴濛濛合間はつれた方の方角を見窮めて下るに危険
の極点へし辛艱苦どもいへども平澤は遂に夏帽子と眼
鏡とを失ひ及ばれて追へども及ばれて忽ちて二の鬼ヶ趨趨と

と五前をすぐ捕んと試みしも遂に得ず漸くにして小沢に出づるを見れば
岩壁の間をぬけば風前の灯の如きは甚しかりけれ遂に下りて錫杖清水
を汲みて力を新生の想ひをなしたり勇を鼓し疾走して山を下り午
後遂に百澤村なる某の家休憩す因顧すれば雲霧萬
里山を鎖し紫雲漠然たり老嫗曰く皆神隠し也と
登臨忘眺すること得し又暫りて此前後の或は是れ山霊特
に變化を以て五を過し才を試みんとしるに非らざるか此日猶
早ければ紙滝澤なる長慶天皇陵に詣でんとせしも黄氏の
なりければ急を達ぜず夜十時頃まわり平澤氏の宅にて酒を
酌み疲を慰めて睡す翌三十日は一日滝滞にて餘勞を暫す

三十日朝早く起き出でて平澤氏を煩し青森の方を向ひ歩
む岩木山を仰ぐ峰突嶋巒として秋
然として五と別るるに臨み微雨綿々愛す秋
に城地なり昔し長慶天皇の遺跡なり弘天皇紀伊国五りの宮を
出でさせ給ひて伊勢なる此国氏に頼り南山の興復を謀らせ給ひし
時到りて果さず特に聖驥を東国に遷し此城を據りもし
を南部氏の為に攻められ力竭き終に一方を切開きて紙滝
澤の地に逃れ給ふ時に聖寿二十歳を以て天皇の
御孫某僧験道を修して曾籍あり山上に寺院を設け天皇の
冥福を祈るその寺に秘蔵する古記録は歴史の遺漏を補ふに足る

のうさぶ猶ほ天皇の陵とて三尺ばかりの一個の墳あり疑はし
陸奥の奇陵なるべし高門瀑布と十和田湖とは必ず一日の事なり
前の西南里ばかりに金谷国の行時日なきを以て行き見ざる憾
退国海軍場より待つこと少許にして汽車に乗じて青森に出る事
なほ先づ有名なる善知鳥神社に詣で遂に渡海の旅客となる
し数時間休憩し相附て汽船豊効丸に乗り函館に航す船
天全く晴れ銀漢一株の白を流ばし流氣碧空を洗ひ白露
江に横り江岸の樓閣参差として彩燈水に映ず忽ちにして
流星の長芒を引きて孤帆を畫き海中に戻つ波色空冥と
して暗く潮聲拍拍船腹を打つ夜半に汽笛聲碇を拔いて発す

十七、四港

「月二十九日早旦船四港に着す船窓より見れば旭光線曙色
正に開き樓閣璀璨たり船船に乗じて上陸し先づ街衢の様を見るに地
勢高く市の清潔なること神戸に似たり中に敷設せる水道はか
の横浜の如く交人野田鶴男を訪ひ其宅に寓す小樓より望めば
港灣一目中にあり風色や佳勝なり微雨霧を吐き遠近模糊たり
蓋し此地海峡に面して絶壁霧の朝晴の日は稀なりとぞいふ
午後宿屋に憩ふ市の東北に当る絶壁に臥牛山を負ひ前に大海を控
廣に新岬の美を擅にす園中に花卉を植へ池沼を整つ四囲
綿霧として緑陰濃かなり池水文を成す

一坂を上りてアイヌ学校に赴くに校は米国宣教師Nathaniel の設立にして公地頒賜の地高燥樹木蔚蒼仰ぎては臥牛の翠巒窺ひては北海を眺望し俯瞰公園の清楚無比にして塵界を脱離す閑雅幽邃殆んど別境の想あり数畝の田園菜葉皆油を滴らし周囲小屋を構ふ屋内人行余等の来るを聞ふ是アイヌの老夫婦にして生徒監督の任に当るものなり校舎大いなり座敷を求む此頃討死して居ひを実に如し然れども宿を取り見て以て大略を知るを得べし校舎は木造にして四間宇つに班搗窓を以てし中央の一室食堂及び厨房となし左右両室を男女生の寝房とす構造船房の如く間口三十餘尺を容るに足る其傍には各浴室あり食堂の正北を教室となす机大約十有餘あり四壁掛けたる基督聖徒の画像及び二三の本邦地図を以て黒板に書き殘しあるを見れば猫牛馬等の単語及び羅馬字綴りのアイヌ語本を基置し其側に珠算器一架あり以て教授の課程を知るに足る校舎を出で偶ま一夷兒に逢ふ裸脛蹠足にして復を穿ず正に草を刈り余等を見て果ち南に走る傍の語を以て誘ず一督勇壮強健の風あり生徒の年齢は大率十歳より十五歳に止まり其数男女併せて二十有餘人あり之れを佐氏の宣教師となりて西港に来り鋭意アイヌの語学を研の奴僕婢隷皆悉く人を従ず終に一校を創立しアイヌの子弟を招

基督教を『妖教』と誚り、バイブルを『欺典』と譯す、敵愾心の猛烈なること船と『靖敵遺言』時代の人ふり。

き皇室を損て學い斯に徒はしむ文学校乃ち昌平と鳴
手天真爛漫の紫宸を駆て妖教の高牛に陷らしむ嘆ずべき悲
むべし方今、明琴上に坐す主化の德幸土に及し皇澤の休息阪
に浴わがまゝ子はなし嗚ゝ蝦夷部屋の狂瀾まい歩を進め遂に
大事ならんか嗚ゝ嗟是果して誰れの罪ぞや
ああ志士たゝば碧血碑に維新の大王師に抗して戰殺し者
の為に建つ烏乎何者の狂暴に順逆を誤り節義に抗し無辜
に注きぐる然れども此の麾下の雷霆に接し婦人孩子の丈夫
ぶ神氣凜然として生るがいきを完る一殘て去り海に沒し臥牛の麓
をすぎ二三の神祠に憩て夜宴を設く陸奥聲に驚佐

三日快晴草條の殘露全乾の時を料り屋後の臥牛山に
最高峰に達す山は甚だ高からざるも嶮崎崎崛、地は半島形
を成し山は其端にあり海峡の中朝陣高馬を駐し恐山は東南
に聳の翠を浮べ南は陸奥の辯山岐を堆し海氣の龍り
出る木の峰挺秀として立つ北は港灣環をなし七重連
なり駒嶽の一山其間に聳へ赭赤獰猛日光映射し巖彩
輝て閃く山は四港の此東里山樫麓は蕎菜湖の奇勝
つゝ鴉雪の緑青い鼠ぞ悲しき者良久しうして
下り又海に沒して涼を取りかゝる
午後五稜郭に游ぶ地は四港を去ること凡そ一里城壘半

ば類なく存し枯樹処々に憐を乞する野草秋花を着け
老蝶者を追ふ四顧人家を見ず凄寂満目我懐正に沸
こりタ陽西に傾き老烏陣ことに忙ぶ乃ち帰路を秋く拝し
郭外濠水氷を製造する所にして夏は氷を行商をなす
みさかいの他にて墨間の穴を見る此日暑熱甚だ又海
に浴す在はこれを以食慶の遊につらなり杯酒献酬の間に
詩数首を誌して走に呈し其百言意懇情を尽す夜に入て
繰して乗て某所にて乗船切符を買ひ堪れいる野田氏二美
と余を送り乗り税関付のボートを針し余を乗せ書いて本船に出
りて別る舟は午前九時に同場所を出ちし此夜海上月書の如し

十八、野邊地

三十日早旦舟青森に着し直に歩して野邊地に向ふ市をすぎれ
ば大澤あり即旅園の練兵場なり廣袤里余餘り秋花満
目艶美見ふし野内父果切をすんば唐妹橋道の地にて此
間汽車の鐵軌汀岸に有恰も興津のごく風景なり
かしは者の様なり鐵路の側には波よけの石垣を築く唐妹は
一に鳥頭前と書し東鑑に所謂宇多宇末井のかけはし是なり
俗は此処海岸に接して小径を通し小灣嶮崖の上に橋梁架
し其傍に石碑の宿と云ふ岩間にしるし文明一年藤原泰衡の
遺臣大河治部兵衛なる者亡主の仇を報ぜんとし出羽に至りて徒党

子人を得自ら詐りて源義経と称し陸奥に入り由利維平等を亡ぼ
し津軽に乱を起し勢猖獗を極む頼朝乃ち之利義兼に葉右常
胤豊能員等を召して之を討しむ小山朝光等陸奥に住する皆
會し兵を進む兼任乃ち栗原一迫に防戦せしも衆寡敵せ
ず敗れて此地に来り桟道に壘を築きて死守す義兼等之を聞き
大軍を以て襲撃し兼任駆られて苗山に向て逃走すと其二屈
強なるものは兼任が武器を藏むる所に走りしものならんと云ふ逸史
の傳ふる者此の如し小河内の人し仰仰自ら威を恃ず
水を渡り西南三才は山を負ひ北
には鶴嶋ご子島生子島湯野島等の四年を凝らして浮動

黙綴する所潮水彎環して濃碧揩ふ如し棹歌欸乃舟游
垂釣最も逸趣を添ふ地に温泉有り昔日一頭の牡鹿ここに浴す
るを見て神異とし恐れて浴せず佳人布を織りつゝ麻を浸し
て蒸しける故に遂に麻蒸の湯と称ふと云ふ三里余
いくゝ其間すべて山路にて風光に乏しく野趣地に充ちたり
路は海岸平沙の上にあり黄昏驛に達し投宿す
有名な錦木の舊址は荒果て其跡だに
知らず或は久寿坂の地なりとも云ふ顯照法師の説に往古東奥
の男鹿なる女を娶らんとする人女やる術を知らず依て錦木を長
き一間許りの木を斑らに彩りて其女門に立つるとき女の達はむ

世思ふ男の本性早く京に流れるれど遊はしと思ひ錦木の言
ながらに朽ち果つるもの今は古き昔の俗なるべしと
こと問ふこと能曲の中にも千年の風流艶事人をして情趣
しむ知らず其塚なる錦木を立てしと意を達せず戀に焦
死しこと風流男を埋めるる墓なる乎錦木は恋と美はしき木
にし其葉四季にて青く秋は紅葉すと必ず余新前にて佐藤
氏の園中にて見るべし

錦木は立ちながらこそ朽にけれ狭布の細布胸あらはすや　能因

又千代の必つ地と必ず此海濱に居るはしなるが今は能を知らず
とぶ

十九　怒山

怒山は一名を宇曽利山と云ひ斗南半島の中央に鎮まる青森山
にて海拔二千七百八十三尺を聳えたり一は大湊より一は田名部より
九月朝發十四里を歩し黄昏田名部に達し拉宿す其中央に
横濱と云ふ驛ありて人すべて海岸の平野にして皆牛馬の牧場なり
諸処に牧場木戸ありて見る海は遠浅にして別に奇景なし横濱町
をすぎし折友人理学士新城新藏氏に逢ふ手を握りて別れの情
を述べ面と面を交へ別る此夜雨漸こして寒冷しきり
二日軽装にて發し怒山に登る其間一日八十、一丁毎に石標ありて別る
処林樹鬱蒼として書昼なほ暗く下道(しもみち)は雨に濡れ行歩やゝ難を

覚ゆ折し流雲雨を吹き四山暝蒙として脚下海光窈然たり遂に
恐山湖岸に出づ此に硫黄採掘処あり茅馬負出て田名部に送
る賽路の大なるは一ヶ所にして湖周二里風景大に奥城の
大沼の如し（硫黄の色が仏の寺の色に似ている）
（湖周皆硫黄の大岩にして赤彩と美はしく硫黄の臭鼻を衝く）
寺は伊達の慈覚の創に係り本堂は其手刻地蔵尊を安す地蔵山
の半腹にあり四方峰巒重畳し蓮華葉と象る地獄めぐりと賽の河原
血の池極楽浜紺碧の海面に富士を望み其他の大地獄めぐりと称する硫烟
紅炎し宣長翁詩あり其他小堂多し（「宣長翁詩あり」）
「宿坊旅行者多し」「奥の院を尋ねるもの多し」

地蔵堂の西に温泉あり何論硫黄泉にして無色透明臨浴
泉質奇異皆硫黄を含む浴者は先音を粗脆浴槽は石を以て畳
み屋根を掛て仮宅とし風雨を凌ぐ陝隘粗造なり登賽者は自
由に操浴すべし婦人舎に入り浴し婦人は男子の浴を窺ひ堂下に進し
印也吹に雲煙や晴れて青森湾は脚下にあり大湊の湾は碧
鑑を同す蒲帆午日を帯びて駛す大湊は行程五里ばかり
田名部より北は二時夫にて又直渡し七里半にして杜内宿
賓村を過し投宿す盆踊頃に盛也小兒女男子浴衣に赤
き帯し青き手拭を冠り輪を作り歌を和して踏舞す
太平の景象と云べし

『見けさしみ』例の魂を養る

三百、午前浮橋港を発し九時野辺地に着し十時半頃の風雨を衝て南行す此行途中幸に久々滞在せしを以て実際歩行せし里三十余位なり道程すでに四百里舟車の往還合わせば七百里遠く陸奥国の山川海岸を経しを思ひ出せば幾多の勉強なりしと雖も見聞せしこと可なるべしに最初は盛岡まで歩し以て前年の旅程を続く樣考へむ農中やゝ寂寞を感ずるに至りぬ是非もなく又歩行して左程の名勝もなく大抵は車中より概し得べければ足れり矣隧を得て蜀を望むは人情の至中よ程に減し切り上るも一興なるべし

福岡より一泊を経て十時半頃の同鐵路国道を車行して午に馬淵川を渡り陸道に行鐵橋にて其路絶えと雷電宮を過て函根山中の雷と同じ即ち三本松の遺址なりと有名なる浪打峠の近傍帯なり但宮内より盛岡に至るの間車窓より老年山を望む夕陽山脊を蔽ひ紫色ばかりの陰影を画きしかれば絶景なり前年のこと思ひ出で感慨堪へず山容嫣然として其道へ四矢の指を示しうるがごとし夜九時一同上着し車を下り旅宿に投し翌日気車に搭し午時仙台堂に着し寓するかゝる此行日を経る総計十二日、七月十五日を以て復し九月四日を以て行を終る概して奥羽の山川峻嶮にして危艱を極め世に知られし者多くに他

四子機を得ば布鞋青鞋却て人間未知の霊境を探
り尋し書し可嶽の英霊と今宵を馳せ不朽の文章を鑄成
すべし好奇の勇士国土死を辞せず張船山句に曰く以骨撰
青山と斯言豈を得らんと意

ひろひ皆（芭蕉紀行）

ちよけの

身を古洋服にかためし財布も手帳をかくしにぬぢこみ、手に杖と携へ、

なを手にたまる春の休暇はわつか七日ばかりなれど、俗人の世を

ここにかはせるは知る人の家を見のこりの名所を見

ぬ人なきことにて、健脚の世にはいつ

のまく形影単頂天立地のたゞ一人、ちゝまで除籍と胃して呉れむとも

其未だ出でざる錢財もつかはして惜らず、也若の夜佛友四方太氏

来訪せられ一句を乞はれて、花の咲く人形一つかつて見

賢者は一書を見て楽しみ、愚者は百冊を詩の組しめかたの道を此に

而して来る万人の中に名を遺さんとの山路はもの上れば平地か音信を遠ざし

ところ見るよ所今は大方消滅せんとて東西さまの通しやすきこと絶はるかの

そこに山見水複の山路なりと記はるかの跡すなわち二年の前の春

花咲たまゝ得たる

花の姿は

一本

杖と携へ

若松紀行

一、材木巖　西甲四月十

甲午の春の旅は半田より小原に来りて知らぬ所にて材木巖

の奇勝を見て僅に七町の長なりと雖ども後に聞きて悔の八千度倉東の如

トリみ〳〵を臨てこれを合掌は是非とも見べきものなり米澤

街道なり畳にして岩下にあり

岩は白石の左岸にあり其長三四町にして

数十丈の材木を正に整束積重ねしものゝ如く

角ばれて或は斜に用ゐるもの長三尺ばかりは

累々畳として或は柱の如く或は棚の如く或は櫃関拉板の如

路から離れ

上に生る青苔

微かに見えて心地よし

茅萱に秀緑

指に負ひ

春の川辺

十軒茶屋

山中の林の

陰

市廛を遠く隔たる

直く臨らしてその幾千仞、幾千重なるを知らず。虎岩腰間の二
峯は對峙して寺を挿む。門の形をなし、苔蒼然、峻絶、峭崎、おのおの
白石川、其間を流れ、溪間には古樹蒼鬱として鮮淡し。岩上に
點在せる小松と相映じて、嵐光百變す。一線の國道、川に沿ひて通
じ、行人樹間に隱見し、驛馬岩畔を過ぎ、岳腰高低、宛畫
中の美、如し。

林鶴梁の記文、まことに此勝を盡せり。
はじめ動すれば東異の色、歡を称して止まず。余、此を見
れば、積年塵に屬して、心、思はれ、且、岩石の色彩、至りて甚
だ美なるを、此、壁、たとへば、拳大の一塊、定静の方、時に

山鬼水靈、斬ずるを待ちしかのごとし

奇清

神工鬼斧、鏟鑿、陰陽の妙、至りて、言、敢て、先
相傳(て)曰、往古の飛彈のたくみなる匠、聖徳太子の命を受け、
聖徳太子、一夜、千人の石動堂を造り、已れ、此術を以て、
之を斧斤、鑿斫、斬、切、千年を俟ず、生像は夏の松か、知らず
明らかに、東方白を見ずんば、憤慨して指す、其斧鑿を
投げて、凝平に、投げて去り、其、三試の感、ここに、
石、ここに、旨、誕、甚しき、笑を傳へ、過ぎて、要するに、造化
神自然の神化に外ならざる、此理を解せず、往往
奇を好み、怪に惑ひ、臆測、敷衍して、焦、怪を、是れ、求む
を、欲す、夫子、怪力乱神を、語らず、嗚呼、斯言、

いづれも、あり、
音界隈の伝

岩の東方第を節蓋とし第二貫材とし第三を上鴨居
さび等四を角柱とし第五を敷板とし皆かの老弾工の傳
説なり此を中略す

黒川の急湍澤のせく岩を衝き岩石の年を経て崩落せるの歳
中幾千萬年なるを知らず一度剥落すれば復元に戻て出づ榮
枯なく激流の居に流れられて去らざるし尼ども都城を
過ることと卿人相接して山神を愛惜して出さざる異人情
しむ笑やしく流住石伏し巖時や荒荒又荒荒
岩下に茅屋二三あり就て仕望すれば暑叫沈吟数句を得
て去る

二、檜原嶺　買吉一書

和尚仙達を歩かし流車に乗り白石より村木峠を見渡淑
風を吹て蘭田に入る偶村家の婦を迎へ家に楼賦して
又高を歩す

春三月長者の嫁を迎へ
湯宴をすぎて屋に帰雪漸く深し磐梯の国境を越れば萬山峨
峨として飛瀑北に流れ夜七分を過に井宿つき接宿し翌二
日早暁又發し高畠を経て米澤に入る此間雪霰霙雪もし神
祇の恵なるべし茶を飲んで旅酒店に行きしして金御方
は酒を沽しと存じを一言に別れ猫丸と物色しまんど遂

に得ず或は其先行せしやし料り難しとて立ち檜原を白く後にて吉け
ばは宿を得ざるなり遅かりしかの旅宿を求し極めて難しとせり
米澤の市は三里前に見物しつゝ行きすぎ遥かに南を見
れば峻嶺萬丈天を摩し曇陰濃として飛しかり降雪
白まだしてなく訪ふ人なきを見て
本山寺を過ぎて綱木いいと甚間四里許り三小嶺にて降雪
綱木より直に檜原嶺にかゝる上り凡そ一里半餘雪の深さ數丈
高さ五六尺の道を通し往来の人行く兎角せず
りやすく或は足踏みして雪の下の小路を踏んで

大壑非常にして蛟龍ひそむ枯林雲深にして怪鳥叫ぶ
客心驚かす計りなし人に遇ひ三里の間進退四方漸く絶
近隣ど直角を進む樵雪の上に手かけ上る老艱苦極る
陸奥羽州の國境にして國境候ては雪の上に僅に數尺を露はす
ばかりなれば谷の底の寸法を以て類推して陸奥羽州
天日全く光を失ひ大霧濛濛ことして起り風流雲綿のごとく
高くとして飛び迷ふ下ること里漸く黄昏なりそまって雨
俄かに到る四圍の峰峰密布して白無の中に
可笑し見渡せば影だに見えず檜原湖岸を沿ひ行くこと數
所湖畔の孤屋を探ず夜寒甚しく文字大燈の設なり

前章熊様山爆裂の沙石陳に此邊に流れ溪流を塞ぎ
遂に此大湖をなし若干の村落皆水底に埋め湖中に林樹
乃出し雲霧すあり其状恐るべき来
人家は高所に移遷すとぶこと
べき塩路もなし先は全く凍結して氷上通行自在なる
は皆驚けて氷塊間に沒び歩み難く又舟をやとはしかし
宿の老翁に問へば爆裂者の惨状を問ふに接続して
書きべ慰として目睹するがごとし黙然らしむ
十日雨晴れんとす天猶くもり湖岸を沿て行こと
里檜原村を老又出でいるこれは檜原のごく高からねど

雪深なること彼に比べ
村人皆山に入て材を伐り弁
丁ことして木をもびき雪上皆橇を用ひ四蹴富蔵寒雪
鎖し密生森林雪を重ねて見下の所にしぶきかゝるず
て雪にして塩ふる萬山こに畫き雪となるなり我が行路
を生て心地実然、時に會津の大溪谷を望む
これも一重許にて吉多方子出で又一里にして坂下に出る道路
平坦にこゝに出る太方は張り一帯の山こゝ次第下る風
寒き身に生覚へ坂下より堀ふ道を詳と越後街道
行こと一里半にして漸くに之を使り真に帰りかしが日暮れる
さして藤村山中の一茅屋を投ず、こゝにては猶雪

三、柳津虚空蔵　十三日

早朝出発、坂を登りかけて見出でたる山道をぶらぶらこと一里半にして柳津に入る。圓蔵寺は古昔吉祥の古刹にして、俗に柳津の虚空蔵と称す。古者より国主の尊信厚く、山の繁華今にして衰へず。寺は岩石の上に建て、道の側より屹然として起る。青々たる老樹、春日のうらうらかなるに浴して、霊鳥囀を鳴く。伽藍の中央なる虚空蔵堂は、金銀を鏤めし輪奐雄壮、実に壮観を極む。世に光り堂と称せし維新後焼亡して壮観目然衰廃の感を生じ、且下保存法を講ずるも、然れども規模宏壮なる屋宇として当代中の大伽藍と称するに足る。

四、美松　十四日―十五日

美松の地なるや、東南は島帽子脊炙等の山脈を受け、東に瀧澤川の流れを帯び、流石に名所の地と見へ、人烟稠密、小市街を負ひ、西北は平野に臨んで湯川、其中間を貫き、又曰橋川の流れを帯び流石に名所の地と見へ、人烟稠密、小市街

流落なるべし。余が市に入るや先づ目に入りしは

如意庵中屋に懸る千り春の風

なりけり。市の中程の北に張出でたる町を通り、或店にて地図一葉を買ひ、市に道路の仔細を尋ね、平坦なる先づ城址より見初む大年の石垣高く、市の中に聳立し遠は外濠の在りし処なるが今は跡形もなし。学校設課の時や既に少年の群を出して通る中に

竹刀など持ち行きつゝ道場に此はやらと覚へ面胴の打聲遠く
鳥羽の亡國の民奮起せんとて此高武の風行はるゝかと頼もし

春風や悲歌撃剣の人は誰れ

四藩黌文武館の址今は中学校となる城址の西にあり
きて城址に来れば石垣のみ残りて中庭風不敬なし大方は麦畑
となりて百年の松は曜風を吹びき颯々として亡國の恨に鳴く鳥

手衡信濃守忠宗頃遠の義和を以て論ずるに一朝兵を
境に逼り降旗城上に靡く玉石共に焚け今は焦土国破れ
て山河のみ

城址や花なき春を鳥ぐ鳥

城の周囲は昔し藩士の邸宅の跡とて石垣ぶ是は楚ぶ生
茶花(椿)を植し蝴蝶飛ぶとして飛ぶ中に東山温泉ある
地は美松の南北一里に亘り三面に峰巒屹峙し西方の一面開
豁して田園に接し湯川と云る小流あり

温泉の村の柳かな

川は環流して必ず悪臭を放し山光水色や咽喉にして宛も函
根の湯本の如く人家数百軒大廈高楼両崖に立ち簷を列
ね覚を異に里に旅宿複雑にして妓楼多し或は風光秀
して仙境と云ふ由なれど人事は新しく之を俗境と云ふ

春日暮す女郎屋の窓根に緋の帯

勾欄に美女憑れつゝ春を懐ふ

湯は温類泉なりし無色透明臭氣なし拾箇所数間揮発

此夜芝松市中に出火ありやゝ半ばくらゝ様子なりし

翌朝宿を出て天寧寺とふるさとには保科氏代々の墓碑あり

其の田道を辿れば林ふかく木の葉がきらひし蛙鳴

墳は皆石龍を設けて敬し碑は数文其前に立つ文は皆林左衛頭

の撰なりと十数ヶ所ありて寺は廃して跡だけなし

碑十丈林の奥の春くらし

折し天色やゝ寒く林深くして一鳥聲なく林さしほ也

ゝ小丘の麓を行くこと半里にして飯盛山あり此間に愛宕

神社あり臭ずきに到る菜黄麦緑春色漸く濃かなり

飯盛山の半腹数弓の地に俗白虎隊士の墓あり三尺の石

墳整然として列を成し傍に三の碑あり芝松帯の地は眼下に見る

徳化ばゞ者なれば春なし

山此樹蔭に蟬螺壺あり船筵曲折して上る奇工を尽くす者と

いべし壺は白虎隊士の肩腹の書をかく之をいれば国道として

真に瀧澤峠といふべし 彼の民家役其衝に当りし地なり路や

嶮しきゝ石の磊々として横はり足底を蹂む頃まで風重

路岐出て左に白河街道あり福島道を取り金堀と称するを過ぎ大

野宿をすぎて石ばしる

五、猪苗代湖　十音、

元中ち漁船を乗して苗湖を渡る其間海上四里（海には宿なし）地の人家ことごとく鎖す沖島を左側に眺め湖を半ば渡る湖周十三里連山疊々として環繞し時に残雪を帯びて玉を散ず船梶を操り湖水一碧鏡の如く見る

時は甚景色なし天晴れ風静かなる碧漫漫風なまめく湖の上

帆の影なし

俄然雨濛々として来り一景なし山嶽遠し又歩し中山熱海すぐ

雪残る岳里梅は稀なりすぐ

漸々として雨霧岩根本宮を経て夜行須三本松に入る

田子沢のほとりをめぐりて中山とうたえば

山に入る

山、安達が原と言

安達が原は本松の東方阿武隈山の對岸大平村に所謂黒塚鬼窟の舊蹟あり早朝本松を発し一村落に達せば人家四五戸ばかりあり鬼女を埋めしと云黒塚あり上には老杉を植えて立てり是其埋葬の時標木として植しものなり

石碑あり平重盛の歌を刻す

所許にして真言山観世寺あり鬼女の窟宅の遺蹟にして岩屋あり観音堂薬師堂及び庵あり寺の縁起の大略は左に記するがごとし

仲哀山は往古聖徳太子真言の神秘を海上に開顕し仏法の霊場なり其寺は奥の道数有りて定まらず四方を往来する故に

安達の大原野中に深き処にて里遠き故処に家有て中に大悪流
行に物語り共同に龍り老婆住来の人を取て心無を主人食事病の
為なり是則ち鬼女なるべし（原文ここ記）東光坊拡慶の退治する事は
拡慶出家を謀む為に逃げ出て
かの謡曲と同じ其出し墨なるは
鬼女を追ひ三度せし以「笈」に入れ奉りし観世音光明を顕はし男
秘密を三度に分て終に鬼女物狂身をちぢめ立ることなら沢忽ち眼を閉
じ成仏す拡慶自山鉞を把りて身を埋む塚を作り冬こに寺を建
仏の御
其尊はかの笈中の観音像也
僧を借ひ観音堂を開扉せむ中に二の樹物有り其の左側の
行ずつ夢中の所者鬼退治を心脇に入れて書すこと
安宿を出かけ
ありしかの
土井のゆに
嵐にけりの
ちりに
書物

生駒の行者濃衣を其骨肉の女なりと知らず旅して来りしを勾
引し其腹を割き胎中の兒を引き出す能を写す怪異の事
既に自刃し其能に二股の竹を生せしと云ふは縁起の載せ
所なれば僧侶が世俗を惑に戯曲奇を基として
後に捏造せしなるべし又安部貞任を以て鬼婆の兒なす等
迂闊の言なるべし
は縁起に鬼婆退治を以て人皇四十六代聖武天皇御宇神亀
二年寅秋七月に勅して不動尊を作り堂宇に住鬼
に憑まる性
の宝物の内に
婆の飯炊釜人殺しの出刃包丁土瓶東坊の杖と云し刀鬼
婆を埋めし鉞三文字義家が貞任を射殺し鏃等を蔵し

て寶物とし義を聚め見せしむ由緒と畫とを刷くは御志を
要す、

堂後は巖よりて巖し某国に三十三軀の觀音像を刻す堂側
に陸奥の老樵住せり鬼婆が新を採りし登りし山堂東にて巖峰
殺し頭金杯を取ると伝へし東光坊が三度せし処を三度かへりとんひ又其慌て拉けすと
黒塚は鬼女の住む窟へ一大石有り法螺石といひ居其
爭せし城池國傳へ法螺具の化せしものや傳ふ
法しや寺道の院の住職
妖怪を女の住せるを歌
ひまのたる坊主のかたりつかさ
こよみしと以て(甲脇)鬼を
せ祈することは今毋とて
欲心ふかきものく人を殺害し
金銀をを奪ひ平安
は皆鬼心或は政事悪まれ
頭なを百姓と無法の金銀

古歌

しくれせし安達の原のうす霧にはぐくまれて秋を残れる　定家

栄誉ある人間はゞや陸奥の安達の真口紅葉しきやを　堀川左大臣

を奪て奪ひ取り下に難
儀をかけるを人へに出る
者を徒党をこ待
て脅なさものを殺す是
鬼の一類や女を刺しこと
くし安達が原のこと
いしは一理なる
ことなかれ、

十村の菅藤と以て書に曰く兼盛の歌に
みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもりてすきくはまとか
とは陸奥名取郡の黒塚も此処に重之が妹一のまゝ待る安
てひかはしこもり里之が妹を殺に鬼とへり是はふるとり
みちのく先黒塚は、ねそろしきところにて鬼すみ居ると伝へて兼
盛をよが詠みしなんかまことに跡とふまことなりと此説有
といふべし鬼まん角まん黒塚は構成せしものに疑ひなくしかし後人
こそ見たかぶれたり後人祝成の翁のがしか問て書き捨てしに江戸名所とはよ
聞く主昭君の墓胡地の中にいりてひとり青塚の名
いつゝけに青塚の名珠にやきしく美人の塚のくさくん道も黒塚

鬼住む岩屋高き
さくらかな

堂は老杉の中にあり老櫻稚桃参差其間に交る春光書画のごとし

此辺り二本松より松山福島を経、霞に白を信夫山を眺め、

奥折に達し午後深の流車を発し夜仙台に着す

附記

此紀行に俳句を皆悉もちらぬものなり此紀行に俳句を

多く句のやゝ佳なるものは先枝句集に収めんず此たびの

此游をたすけ、先ち俳友方太二句を以て餞せる俳を附記す

花の頃一人旅してかへれ君

一たび羽黒宮にまうでし身は花の咲く頃に行を微吟して、折ふし伽藍に詣で

て待ち侘びたる人と又程なくして帰れきたれば浮き世の中の収りの付かぬ

四月十日仙台を発し、入日の名残は雲山の波間にうつるを見て、

短冊長方形を書庭の向に送りぬ、夜は七時過に仙台の野に入る

旅衣はな野の中に印し　やがて七ツ、因幡、酒ちんど

春の夜や旅の九九を唱へ　まだ五もらべさん

旅先の不枕夢のさめ

月ぞ宿かな竜

春の名残四月、

十歳の春をむかへぬ

やがて青城板子りの宮をせし　底家二十七のこととして数子小けけ下

年十七年ん友を負うて来　世の荒ぞ以ていひし開…　いつかた…

常都

花…かし戦国を…よろづの役ちーのーる合

長…經繹…里…はかりなれば馬上の青衫…を陽に揚りて…二早枕武

落寒子…の低と去ることに…

にありて…星月しの光を眺めつゝやがて仙臺に…

朝に錦…の夜を…して…

…御…せめ…子の使…

杜鵑せり

西城

漚夢録

青葉城の跡は昔の俤をとゞめず今は兵營ありて太平の城門の残片は太閤征韓の役名古屋の本陣に建設したる營門を移したるものにして昔し政宗が請ひて拝領せしものと云ふ櫻岡公園は川を隔てゝ之と對す園は梅數十株あるのみにして些の趣味あるなし大倉嶺と云ふ處はここより北數町にあり昔時癡男女の情死の跡を残し五月雨の夜鬼火燃ゆるといふ　瑞鳳大年の二寺は向山にあり共に藩主の墓域なれども或は燒け或は荒れ經ケ峰の感仙善應の二殿のみ僅に全碧の名残をとゞむ愛宕山は二寺の中程にあり一小丘にして眺望隙に似

し、廣瀬川を橋三つ架し外ふ処に渡しけり宮城野萩は名のみにて太才は畑さかり秋の嶺の五葉ふきて榴岡の櫻皆柿有の実にして春は花見の人孫に賑ふ釋迦堂の木蓮花し幹枯て枝の処々覚束なき実き匂ふ國分寺は原の中にけり寺かな空宇恵くちて破れ瓦多日の庭にちらばるの苔頭偉人の名をとゞめし林子平の墓は市北雲龍院にけり流石に憑弔の客心多しとなく日東の壮望奚とゝいふべき支倉常長の墓は前の次光明寺中に見出され支離せる上石三個若き墓にして文字し朧なり亀岡大崎青葉東照宮のやしろ風打雨淋のつもきびしく東雲市端には五輪ありて敬角の聲相和して少こゝ

二、

越澤の碑弓賀の碣裏沿ことして真偽定まらぬ所少しとも踏の名高し十符の池末の松山野田の玉川は歌枕として人の傳ふる所多が皆怪しとゝ思ふ沖の都島沖の石なとゝいふ多いはんにやゝ又名所とゝ知らぬ所は者すなわち見ぬ者に値とせし、

三、

塩釜の祠は丘の上より奥州一宮にして御産の守護其名知る社例もうるわしくちぎりをなり風景量又上し舟を飛ひて千賀の浦を出て松島に入る島のくさ〳〵海の色はしきの美しきまけに心もことばも及ばれぬ千はやふる神のむかし古山ずみのなせるわざとや造化の大元

ての人の筆をふるひ詞を畫き出せる蕉翁かきつけられし理り
おのづから繼ぎしはとゞ心共共辛卯秋九月廿三日のことにして雨僅に晴れ虹
江天に横はり島々すべて遠して見がるけしきは柿本遇之の
しるしもとゝ求むべきなり皆、島のかたち位置事細かに記せんは
煩しきのみにて益なきゆゑ雄島丈量は松島村より近きをもて先行
さるべきところなり五年の間に産業衰し雨の日、月の夜、雪の朝、四時の
出など大方の變化は人畫しくれむ人は思ひ置くこともあり富山
多門山、扇谷犬吠島林など所謂四大歌の中猫とのみ見れば
小の花や、飽迄忘地すべ富山は三度訪ひ二回は寺に泊りぬ世
後松島に明暮し帰路時雨むる猶は瑞巌寺に編して玉無實

世ぎらひかゝしと心を理と覺ゆれば島嶼洲渚の連接して見るほどに
要するに松島全体のきまは天工細緻を尽せしの極人工と悞まれ
雄偉閑大の氣象なし獨眼龍の遺蹟とゝふ瑞巌寺や定慧寺
四
真菖の姫の磯づたひの一書、代嶺より富蒲田までのけしたる事
こまかなるつしるも同然すべ所なく後世の者其上に出でんこと難きや
う覺ゆ。この辺りちかしるまき岩どもあり波白して松青し松蒲島
を以て其極点とせれば南保は岡上荒濱まで、つゞき一も見るべき所
なく相馬まで、こゝに松川浦の奇勝を葉
五

野蘚に近き蛇田村に靈蛇田道の塚あり、石表の東端にお護良
牧王の陵地なり傳ふ皇子の祠あり、共に構造しる者といふ、

六、

仙堂より最近き温泉を秋保とし他に作無定義なり、秋保は現
橋の勝れり、岩石重錯し峡勢頗る壓迫、水之を傍き上に危橋
を架す風趣奇怪を容る、温泉は効能あり、すばらしきなり也、
作無はやゝ高し、路に鳳凰澤あり、定義は路の風景殊によし
乗るべきことは余が漢文まとめたる船嶽紀の中にしるせり、

七、

曽田より三十町赤く光がる山の下に実方中将の塚あり、方一間許
赤く高く柵を圍みたり、この近らに笠嶋祠、枯野のすゝきの株、
西行の歌、蕉翁の句を刻みたる碑あり、ここより半里北は能野
宮あり、曽田には松笠の松、植松には館腰神社、岩沼には竹駒
神社あり、竹駒の牧に蝦夷穴とて穴居の遺跡と称するものあれど信ず
難きにあらず、

八、

此田には赤穂義士の中自刃をのがれ過国して隆信せし寺坂吉
衛門の碑あり、驛の端には同雲寺とて名僧法方の監あり、依
上山等と笠田村将軍の創建なりと言ひ傳へ女性男性の骨黒蛇
の角、馬の角など怪しき寶物を傳へ縁起の詳細は或書に見さ

ゞど山鳥の尾の徒らに長くし寺は渓壁の中に在り九十九峰囲
を環ぐり景致幽深なれども此もん。

九、

冷泉廷に在り松島村及び塩釜より富田へ行く道の中に
在り仙臺の北端三峡山に在り夏全清涼を生ずつらび小夫瀑を
懸く、土宝森は七嶺峰の北に在りこれは未だ寺ゆず。

十、

石巻より荒浜に出る十数里の間運河有り昔は海上風濤の時
船舶皆此を行くもと政宗の創設せしも故歸して貞山堀と称。

十一、

瀑は大瀑を最とす仙台を去る西里鳳凰瀑之次いこれは仙台街道
中宮棒木に在り高さ丈餘を丈餘を三丈上に不動の岡有り空怪の魅崖
より斜出し下瞰すれば深淵百丈樹林倒に垂れ書猶ほ暗濛
として蛟龍の宮居の如く曲流雪を飛ばし岩厚濤を生ず傳へ聞く往
仙台此書り林びて望を遮ぎを因て此に行く瀑下に至るんとす
し嶮崖壁立全く路なし故に金景を忍むを探す東南二町許
に十宗寺の瀑布二條有りしこれ此を見るを得らにや余は曾
て見しことなし朴瀑また二瀑有り上なるを雄瀑と称高三丈巾
二間下なるを雌瀑と称高丈巾三間許り上なる方や勝れ見
る人金かに行き尤しは夏の頃にして緑樹茂清還び書豆の月瀑上に

かゝり深しきこえたる方なかりき、中山石勤和後にも一回許の中瀑なり、

十二、

盤山は雪庵禪師棲隱の地なりきとて知られ、太白山は往古太白星地面に落ちてこゝに一堆の山をなせしとの傳説ありて名高し、俗に島山が森といひ海面を抜くこと千三百三十尺峰容嶄然として金字形をなす、盤山はやゝ高きも峰つゞきにして拔出ならず、西者共寺堂一つなり、半里程なり、千貫松の山は岩沼の西南に位し松馬鬣の如く其みねに立ちなぶく往古國主之を伐らんとせしに海濱の漁夫等き千貫を獻じて之を償ふ因て此名あり、太白山と同じく処々より見へ海上りの目標となるなり、但し是は登るべき程の山にあらず、船嶽は羽前の境にあり高き五千八百尺登臨すれば嶽は城の正北にあり富樓ちよく見る近日將に杖履を着けんとす、西山共に大山也(熄)て山頂山後に湖沼を湛ふ、

十三、

いつの頃なりしか一夜初更の頃雨殘りなく月明かに上りけるに水氣空中に充ちあれば一線の白虹を點ぜり恒常の虹と同じく七彩煌然たり月の虹なれば極めてうすく朧なりこれは奇らしき物の一なるべし、又嘗て無澤村中に於て四十許りなる人を見しに男とも女とも定め難く金等を人に與へるかしが遂に決することなければ一の奇異き物なりしか、

附記　長胥は南は丙申胥は船岩は行軍擧行と余も出きしが何は兄弟

五年の遊夢時に書き分る甚同年見聞せしことも
去思ひ出るまゝにかき付て此篇を作す猶漏れたる多
かるべしは後日示讓るまつ也　丙申青十吾記了

風光賺我便淹留書紛飄零一敝裘
久住遂成鄉國想也同賈島客并州
行春故鄉七十五長亭

昔しの人一日の勝を過て百の神仙となるといへれどわがもろかなる心はかれ
浮世をもろ〳〵の頃程て佳境を過き行く程たわすれぬ生きて苦
辛の仕なひて嶺南の旅をなすことを得るやう東坡が以へるかく大君の
御めぐみをもりて太平の世を生れ此里をうることを望めてさし格は其一時
のなぐさみかは身を折るまで折ることを〳〵の行さまを思ひやれば
又目のまへに見る心地してなずらへ出て侍なり。

見原益軒翁、岐蘇路の紀序、

登山嶽渉川海走數十百里有時乎露宿不寐有時乎饑不食爽
不次此是予少實際學問若夫徒爾明窓淨几焚香讀書恐少得
力處、
山水之可遊可觀者必是疊嶂攢峰必是激流急湍必是深林長
谷必是懸崖絶壑凡其嶽日華蒙密雲煙變態遠近相取崎嶇相

錯綜後有幽致可賞最見坤輿之爲文矣惟有山有水自則行齋趣之有人世亦猶是

○孔子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜

曾點登東山小魯國登泰山觀天下聖人遊觀無非學也

孔子在齊聞韶學之之杞繹夏時之宋觀周感慨往古微服於宋厄陳蔡適衛適鄭適楚皆不得意聖人之學蓋得於遠遊艱難也多矣

○終年奔走於都城內不自知天地之爲大時可以川海時可登邱嶽時可行蒼莽此亦心學也

跼蹐城市紛鬧之衢不知春秋之像觀道遠於田園間曠之地實見化工之無窮余嘗有句曰城地春秋淺田園造化大自須非隱人語

○仰觀山厚重不遷俯觀水汪洋無極仰觀山春秋變化俯觀水晝夜流注仰觀山雲吞煙俯觀水揚波起瀾仰觀山巍峨其頂俯觀水遠疏其源山水無心以爲心俯仰莫非教也

以上凡七條 佐藤一齋先生 言志錄

登高能賦自古稱之蓋人一到景物夷曠之境平日之文思頓減一半無也乃情爲景奪故耳余有一法可以得護我文思使隨境而轉也每到景物夷曠之地或欲有所賦我先閉精斂神畫收其景物歸之冥想而狀冥想中擇情所愜會繼以文字寫之景象則雖以萬里之寥曠書或可一言以領略之也而此法亦自余始有之而人爲有賦亦爲之皆旨意皆以此法但人獨能知心設虛象文字實之而未知實景又

富歸之虚象亭

皆川淇園　詩話

○富貴ハ人の欲する所なれ、余もこれを慕ふにあらずしもしかれども世の中の樂を論ぜむ身のよせ重からで寶もなく衣食のもといつれの境に居れるほむ人を患むかりのきはなりて人のきらひあらそふ富貴のみちは少しもむけつゝ須磨の秋吉野の春住心にまかせ時にわくれず又思ふ人あれむ千里の遠きも必すする哉訪はむことさへいと興深かむとも我の又思ふかもしらず。

橘南溪　西游記